

あ い さ つ

年度末をひかえ、会員の先生方にはお忙しい日々をお過ごしのことと思います。日頃は三好教育会振興のために、温かいご理解とご支援をいただいておりますことに心からお礼申し上げます。

三好教育研究発表会は、これまで三好市教育委員会・東みよし町教育委員会との共催で行ってまいりましたが、諸般の事情により本年度より三好教育会主催といたしました。

平成24年度から研究主題を『未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成』とし、三好地域の子どもたちが、ふるさとの自然や人とのふれあいを大切にしながら、自分たちの未来を切り拓き、たくましく生きる力を育成することをめざし研究を重ねてまいりました。

本年度は、井内小学校、三加茂中学校、三好教育研究所に研究を深めていただき、その成果を平成26年8月21日の「三好教育研究発表会」でご発表いただきました。

- 家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践
～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して～

井内小学校 教頭 住田 克弘

- 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造
～学校図書館教育を中心として～

三加茂中学校 教諭 山下ちづる

- 三好地区の学校におけるICT活用の現状と課題について

三好教育研究所 研究員 岡本 博一

(現 東祖谷中学校 教諭)

子どもたちを取り巻く環境が、家庭や地域社会における価値観の多様化や人間関係の希薄化などで大きく変化する中、様々な課題解決に向けて学校・家庭・地域社会が情報を共有し連携して取り組んでいく必要があります。また最近、急速に普及する携帯電話やスマートフォンなどの情報機器を使ったネットトラブルへの対応も教育現場に求められています。本年度発表いただいた学校の取り組みは、家庭や地域の協力の下、人々とのふれあいの中で多様な体験を積むことや読書活動を通して豊かな心や生きる力を育んでいくもので研究主題にせまるものでした。すばらしい発表をいただいた3校の先生方のご労苦に対しまして心から敬意と感謝を申し上げます。

また、講演は、教育情報化コーディネーター大笹いづみさんに「小・中学校におけるインターネット利用の実態と学校での指導の在り方について」と題してご講演をいただきました。ネット利用の現状やスマートフォンのラインアプリの利用体験などを交えながらネットトラブルを防ぐための知識や知恵をお話してくださり、わかりやすく有意義な講演でありました。

この研究紀要は各学校1部ずつCD化して配布させていただくとともに三好教育研究所ホームページにも掲載をいたしています。ご活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、本研究紀要発行にあたりご指導・ご助言いただきました先生方、研究協力校(園)および関係各位に心よりお礼申し上げますとともに、会員の先生方のますますのご活躍をお祈りいたします。

平成27年3月

三好教育会長 川人 正恭

目 次

あいさつ

三好教育会 会長 川人 正恭

———— 研究指定校研究 ————

- 家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践……………1
～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して家庭や地域と手を取り合って
心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践～

井内小学校 教頭 住田 克弘

- 地域とともにある学校をめざして ……………12
～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～

三加茂中学校 教諭 山下 ちづる

- 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して ……………23

三好教育研究所 研究員 岡本 博一

———— 教育研究所研究員研究 ————

- 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業……………31

三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司

- 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫……………47
～討論活動を取り入れた授業づくり～

三好教育研究所 研究員 井川 秀樹

- 既刊『研究紀要』の内容一覧（平成元年～）……………60

井内小学校研究主題

家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践

－多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践－

井内小学校 住田 克弘

1 はじめに

本研究主題は、日本連合教育会研究大会徳島大会第十分科会の研究協議題である。この研究協議題が設定された背景には、地域の人々や文化との関わりの希薄さが心の未熟さ、規範意識や学力の低下などの問題を招いているといわれていることがある。この問題を解決するためには、学校や家庭や地域それぞれの立場や教育機能を発揮しつつ、互いに連携を密にし、協力して子どもたちの学びを進めて行くことが必要である。そのときに忘れてはならないのは、それぞれの立場を生かし、それぞれにメリットがある連携で、それにより、持続的で効果的な取り組みが可能になる。

井内地区には県内唯一の「腕山スキー場」がある。また、ウグイス・サルやイノシシ、野ウサギなどの野生動物も出現したり、スキー場付近ではニホンカモシカも見かけたりする自然豊かな地域である。井内地区を貫いて流れる井内谷川は、水質調査を6年生がおこなった結果、大変美しく澄んだ水であることが判明した。また、平家が祖谷地方に逃げる際に通ったといういわれのある地福寺など、長い歴史に育まれた文化や伝説が伝わる地域でもある。かつては「井内千軒」と呼ばれ、三好市内でも人口が多い地域で運動会や、祭りは大変賑わっていた地域だった。井内小学校も戦後は1000人を超える児童が在籍し、分校も2カ所あった。ところが、産業構造の変化や少子高齢化に伴い児童数が減少し、現在では、全校児童数は18人、幼稚園児を含めても21人になっている。なお、幼稚園についても、園児数の減少により、昨年度より井内小学校の校舎内に移転した。

本校児童は、人数が少ないため、穏やかで、落ち着いてまじめに行動したり学んだりすることができる。学校行事では1人1人が責任を果たしたり協力したりしなければうまくいかないことを全児童がわかっており、全員で仲良く助け合って取り組んでいる。たとえば、入園入学式では、2年生以上の全児童で会場設営をするが、ここでも、一人一人が役割を持ち、誠実に自分の責任を果たしている。それと同時に、低学年は上級生の働く姿を見て学び、自然な形で伝統を受け継いでいる。

しかし、慣れた仲間の中で自然に意思疎通ができる状況の中、いろいろな人々と出会い、刺激を受けたりふれ合ったり切磋琢磨したりすることが少なく、また、なれ合いや雰囲気ばかり合える面があるため、コミュニケーション能力を向上させる機会が少ないことや子ども同士の関係が決まってしまうことなどの不安もある。

幸い、本校区には井内長寿クラブ、婦人会などいくつかの団体があり、子どもたちを地域の

宝として大切に思い、また、学校教育に対して協力を惜しまない風土がある。その方たちにご協力いただき、いろいろな人々と出会い・ふれ合う中で、多様な体験や経験をさせ、子どもたちが自己実現できるようにするとともに、規範意識やコミュニケーション能力を向上させたり、地域を愛し、感謝の気持ちを持たせたりすることが重要であり有効であると考えている。

2 研究のねらい

本校にある課題を解決し、日本連合教育会研究大会徳島大会第十分科会の研究協議題に迫っていくためには、人々との出会いやふれあいの中で、さらによりよい体験を子どもにさせたり、充実した活動を保証しなくてはならない。そのためには、保護者をはじめ地域の教育力を活用することが効果的である。

本校児童は、以前から地域の各団体の方々や多くの保護者やPTAのOBの方々と行事をともに行ってきた。それらの行事は児童の心に楽しい思い出として刻まれるとともに、生き方や助け合って行動することを児童に教えてくれている。その伝統を守りつつ、さらに、連携のあり方や調整のあり方を改善し、本校の課題を解決し、研究主題に迫っていきたい。

3 研究の方法

井内幼・小学校の保護者には、学校を愛し、どの子も我が子のように慈しみ愛情を持って大切に育てようとする雰囲気がある。また、17軒のPTA戸数だが、各種の行事には、常に9割近くの家庭が参加し、助け合って行事を盛り上げている。また、井内地区には、井内長寿クラブ（老人会）、婦人会をはじめ、いくつかの住民団体があり、学校教育に対して協力を惜しまない。

そのような中で、学校行事や総合的な学習をはじめとする教科や領域の学習、PTA行事等で地域の各団体と連携するに当たり、

- 行事などを行う前の協議を重視し、行事のねらいや児童に学ばせたいこと、身につけさせたいことの共通理解を進める方策。
 - 児童にとっても、連携する団体の方々にとっても充実した実りある時間となるための行事などの進め方の検討。
- について、実践を通じて追求した。

（1）学習の中で

本校では、生活科や総合的な学習で地域を知る学習を行っており、平成25年度には次のような実践を行った。

5・6年生では、環境学習をかねて、井内谷川に住む生物を通じて水質を調査し、川の水のきれいさを知ったり、保護者をはじめ地域の大人に取材して校区内の危険箇所を聞き出し防災マップにまとめたりした。また、3・4年生では、地域に伝わる民話などを児童の祖父母に聞き取りし、その中から、「井内の長者屋敷」という話を劇にして、学校行事の中で発表した。また、『知ろう、伝えよう、井内のいいところ』という単元では、「名人さんに学ぼう」というテーマで、地域で仕事をしている人たちを通して産業や文化を学んだ。1・2年生では、生活科の学習で、高冷地野菜の栽培について、栽培現場へ見学に行ったり、地域の指導者を招いて「うどん」づくりや「こんにゃく」づくり体験をしたりした。

一方、地域の農作物である「茶」「そば」「ゆず」の中から、平成25年度は、「茶」についての学習に全校で取り組んだ。子どもたちは、地域の方々や茶工場の方々の話を聞いたり、茶摘み体験や手もみ体験を行ったり、茶工場に行き製茶の行程を見学したりした。本年度も、2年続けて「茶」についてさらに深く体験をし学ぶ中で、地域の方々の教えを受けながら、多くの人々に関わってもらおうよう計画をし、実践した。製茶は、5月が中心で本年度もその時期に茶摘みを地域の方のご指導を受けながら体験した。そして、地域の方々のご指導を受けながら、自分が摘み取った茶の葉を手もみして、茶に仕上げる体験もした。そして、それぞれの学年で、お茶について学習のまとめをした。

それぞれの学習を進めるにあたり、担当者は、当日ご指導くださる方々と事前に打ち合わせをし、互いに理解し合った上で授業に取り組んでいた。その際、学校からお願いしたことは主に次の2点である。

- ・学校からの願いとして、聞く力の向上につながるお話（それぞれの指導者の方々の思いや努力している点など）を入れていただく。話す力の向上に向けて、質疑応答の時間を設ける。
- ・一緒に作業をしながら、いろいろな会話をしていただく。

打合せを進める中で、地域の指導者の方々からもしろいろな希望が出たが、多くの指導者から、概ね次の点について留意するよう求められそれらをふまえた上で、学習計画を立てた。

- ・一緒に作業をする中で手取り足取り指導したい。（井内の昔のくらしなど、いろいろな話をしながら。）
- ・作業が順調に進んで、成功体験を子どもができるように、先生方に手助けをしてもらいたい。

（2）学校行事

本校は、児童数が少ないので、メリットもたくさんあるが、学校行事等では、デメリットもある。そこで、保護者や地域の方々の応援を得て、様々な行事を開催している。

秋季大運動会では、過去4年間、地域の長寿クラブや婦人会と連携して、その計画から運営、実施に至るまでこれらの団体と連携して取り組んできた。それは、園児・児童数が少なく、プログラムが限られたり、また、1つ1つの種目の時間が短く、種目として成立しにくくなったり、他学年の種目を見る時間もなく、次から次へと出番が回ってくるため、児童の体力的な面からも無理が生じると考えたりしたためである。さらに、運動会で子どもたちが全力で演技をしても、見る人が少なく拍手も少ないため、どこことなく寂しい感じがしたこともその理由である。そこで、4年前に、学校から各種団体へ働きかけ、共催という形で運動会を実施しはじめた。7月末に第1回運動会運営委員会を開催し、各団体の方々と運動会の基本的な方向性について話し合った。そして、8月中旬に第2回運動会運営委員会を開催し、それぞれの種目など細かな打ち合わせや一緒に行うプログラムの確認をした。その



運動会開会式



全員で踊るフォークダンス

後は、直前まで適宜打ち合わせをし、本番を迎えた。その結果、子どもたちの中からは、「見てくれる人がたくさんいて、張り合いがある。」「普段はあいさつしかなしない人たちといっしょに演技ができてうれしかった。」といった意見が出てきた。保護者の中からも「友達や先生、そして、保護者を始め、長寿クラブ、婦人会の方々が本当の家族のように声を掛け合い一緒に笑っている光景を、今でも思い出すたび目頭が熱くなり感謝の念に堪えません。こうして沢山の方々に見守られながら子ども達の応援に力が入った素晴らしい運動会を有難うございました。」というメッセージが寄せられた。そして、運動会后、各団体の方々と本年度の運動会の反省会を持ち、本年度の反省と次年度に向けてしておくべきことなどを確認した。

一方、かつては井内地区を9つのブロックに分けて華やかに競技を行ってきた井内地区市民運動会も参加ブロックが減り、ついに、平成25年度は、中止されている。

そこで、井内幼・小運動会と市民運動会を合同で開催してはどうかなどの意見も出てきており、現在は、将来に向けた開催方法の検討を行っている。今後、児童数はさらに減少し、地域も高齢化が進む可能性が高く、運動会の開催方法を改革する必要性はだれもが認めることであり、運動会をの持ち方を改善することが急務で、より地域と一体化した形で運動会を実施していかなければならないと考えている。

本校の「6年生を送る会」には、地域のサークルの方々が出演してくれたり卒業生に記念品をくださったりしている。また、プログラムに出演はなくても、当日は、2月中旬の寒い中にもかかわらず、体育館に多数の地域住民の方々が来てくれ、会を盛り上げている。



毎月の読み聞かせ

また、春に開催する交通安全教室には地元の愛輪クラブという団体の方々が来てくださり、道路歩行の際には警察の方の手助けをして指導をしてくれる。さらに、交通安全運動期間にも、職員や保護者と共に児童の登校を見守ってくれている。

本校には、25m7コースのプールがあり、プール清掃では、児童、保護者に加えPTAのOBの方々が来てくれ、ともに汗を流し、水に濡れながら作業をしてくれる。



イモの苗植え

これらの行事以外にも、読み聞かせ、地域の方から借りた畑でサツマイモを育てる学習など保護者や地域の方々はいろいろな行事に参加し、共に活動したり側面から支えてくれたりする伝統が井内にはある。そして、その姿を見て児童は育っている。

ここでも、事前の計画や進行について互いが十分理解し、その場で慌てることがないように留意したり打ち合わせたりしている。また、参加している方からは、会話をしたり一緒に活動をして、子どもたちとふれあいたいという希望が出ており、そのことを踏まえた計画や進行を考えている。

(3) 井内子どもクラブ・PTA行事

井内地域には「井内子どもクラブ」という組織があり、保護者が主体になり地域の各団体と世代間交流を通して地域の文化や慣習などを実際に経験し、ふれあいの中でそのすばらしさや大切さを子どもに学ばせる活動をしている。

その一つに、年末には「消防年末警戒」という行事があり、毎



ふれあい餅つき



親子料理教室

26年度には三好市食育コーディネーターの方々を講師に正月の餅に合った料理を教えてください。親子料理教室も開催した。



救命救急講習会

者相手に全力でぶつかっていくことができ、さわやかな満足感や充実感を味わっている。保



年末消防警戒

年本校のほとんどの園児児童とその保護者が参加している。これは、平成16年度に始まった、地域の消防団の方々と協力して火災予防を呼びかける行事で、消防

団第6分団から井内地区の中心部分を通り、第7分団までの約1.5kmを拍子木やマイクを使って、「火の用心」を呼びかけながら歩き、その後、詰め所で、消防団員の大人たちの話を聞くというものである。これにより、子どもたちは、防火に対する意識が高まるとともに、父親をはじめ、地域を守る大人たちの思いや愛着、地域の一体感を感じることができている。さらに、消防団員が整列して団長の話を聞くときの敬礼や立ち姿などから、きびきびしたりりしい態度を目の当たりにし、決めるときは決めること、規律正しさなどを感じ、大人を手本に学び取っている。

そのほか、平成24年度には、そば打ちを地域の方に教えていただいた。平成25年度には地域の生活改善グループの方々を講師に井内地区に伝わる料理を、平成

このような活動をしている井内子どもクラブの運営主体は保護者である。保護者は、PTA活動に取り組みつつ各団体に所属したり、近所の利を生かしてきめ細やかに打合せをしたりして、各事業を計画・運営している。

本校PTAもさまざまな行事を通じて子どもたちと共に学んだり活動したりしている。さらに、どの行事にも9割近い保護者が参加し協力し合って活動している。夏休み前に行われる親子スポーツ大会では、普段低学年を立てて力をセーブしている高学年が、保護

護者も、力を入れたり手加減したりして、子どもが充実感を哀話得るよう配慮している。その後行われる救命救急講習会では、AEDのや人工呼吸をはじめとする救命救急について保護者と高学年児童で人形を使い実践的に学んでいる。



親子ドッジボール大会



親子食育講座



11月には、親子食育講座が開催され、毎年「おやつの食べ方」、「咀嚼と健康」など、異なったテーマで、親子がともに栄養士さんから指導してもらっている。さらに、今年度は人権教育講演会も保護者と高学年児童が参加して一緒に海外の子どもたちの生活を学んだ。

3学期のスキー体験学習では、スキー学習が充実したものになるよう、子どもたちのサポートをしたり、インストラクターのアシスタントをしたりして、スキーを滑る楽しさをすべての児童が感じられるよう支援している。2月の6年生を送る会では、PTA会員やのOBの方も参加し1ヶ月も前から夜遅くまで自作劇を練習し、卒業生をはじめ園児児童の心に残るステージを見せてくれる。

その他の活動においても、結束力と行動力、地域や学校を思う心を行動に表し、活動で子どもたちに模範を示している。また、保護者が学校と団体、団体同士を結びつけ、地域をより深く巻き込んでいき、それぞれの活動をさらに充実させている。また、学校の思いや子どもたちの課題を熟知し、それらを解決する方向で行事を進めている。そのことが認められ、平成26年度優良PTA文部科学大臣表彰を受賞した。

人権教育講演会

4 研究の結果と考察

今のところ、子どもの豊かな体験を育む活動が、地域の方々や保護者が学校や子どもたちに抱いている熱い思いに支えられて実践できているように感じられる。さらに、それらの方々は、子や孫のように子どもたちを心から優しさで包んでくれ、成長を喜んでくれている。そのことを子どもたちもわかっており、地域の人々のあたたかさに感謝の思いを持っている。

今回の実践で、学習や行事などに対して、その行事によってこんな目標を達成したいという学校の思いを全員が共有し、力を合わせてその実現に向かって行動することが本当に大切だということを再認した。「このような活動を計画していて、そのねらいはこれである。そのねらいを達成するために、こんな活動を考えているがいかがだろうか」と目的や活動の内容

を伝え、共有した上で、相手の考えを聞き、互いの思いが実現する形で活動を計画し進めて



みんなが笑顔に

いくという実践により、すべての参加者が同じ作業を一緒にし、会話も織り交ぜ、生き生きと活動することができた。児童の実態や発達段階、教育計画などをふまえた上で活動計画を組み立てる学校側と、活動内容を熟知し、手順や段取りを考える地域の講師の方とが計画段階から十分な話し合いをおこない、しっかりとタッグを組むことで充実した活動ができたのである。その結果、子どもたちは自分が思い描く結果にたどり着くことができたり楽しい思い出を作ることができた

りした。また、コミュニケーション能力を向上させ、地域を愛し、感謝の気持ちを持てる活動が充実してきたと感じられた。また、地域の方々の中には、子どもの成長する姿を見て喜んでくれたり、自分たちが関わることで子どもたちが楽しそうに活動する姿を見て「次回はこうしよう、ああしよう。」と、これからの活動を楽しみにしてくれたりしている。

今後も地域の方々と学校が今まで以上に連携を図っていくために、このような事前の打ち合わせを積極的にはかっていきたい。そしてその重要さに鑑み、これからも、常に学校をオープンにし、学校を知ってもらおうと共に学校と保護者、地域との結びつきや交流を大切にし、綿密に連絡し合わなくてはならないと考えている。

さらに、保護者や地域の人々とこのような良好な関係を続け、もっと充実させるには、同時に、現状を維持するのではなく、もっと連携を深めていく必要があるとも考えている。今は保護者や地域の方々の思いに支えられて「活動をとにもする」なかで、地域のことを学び、生き方を学び、楽しい思い出を作っている。しかし、今後は、教える人と学ぶ子どもの立場で共に活動する関係から、さらに「ふれあう」「話す」「聞く」中で、人間的な関わりを深めて行く段階へ重点を置いた活動を考え、子どもにふれ合う力をつけていきたいと思う。一方、高齢化や人口減少も進む中で、持続可能な活動や活動の持ち方を模索しなくてはならない。さらに、巨大地震の発生に備えて、地域防災訓練の開催なども計画し進めていく必要がある。特に、この訓練は、子どもも地域の中で役立つことができるという実感を持たせられると思われるので、具現化したいと考えている。現在は、その第一段階として、年末消防警戒以外に消防団と連携できる活動を模索している。

5 おわりに

井内小学校は、長い歴史に培われた伝統や、地域の人々と強い絆で結ばれている面と、素直で穏やかだが児童数が少ないという面を持っている。そのことは、プラス面に作用する場合とマイナスに作用する面の両面を持っている。プラスに働く面を伸ばしていくことはもちろん、マイナス面をカバーするために、今後とも地域との連携を進めていきたいと考えている。

一方、井内地区も高齢化と人口減少という問題を抱えており、何らかの対策を講じて地域の活性化を図って行かなくてはならない。

そこで、地域の中の学校として、子どもを育てていくときに地域の方々の教育力を活用させてもらうことは、子どもたちの成長にも効果があると同時に、地域の方々にも充実感を味

わっていただけるものだと思う。

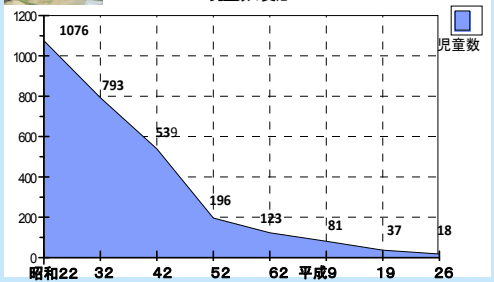
さらに今後は、地域コミュニティの中核としての学校、地域の人と人、団体同士を結ぶ核としての学校という位置づけで学校を見つめ、相互交流の中で心豊かな子どもを育てるとともに、地域を元気にできる井内幼・小学校でありたい。

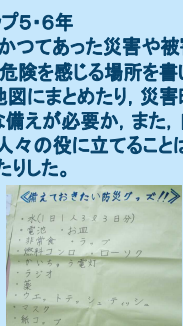
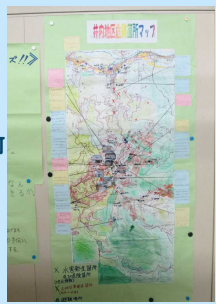
※ 本文中の写真は平成26年度2学期に実施したもの。次のスライドに使用した写真は、平成25年度並びに平成26年度1学期までのもの。

日本連合教育会研究大会徳島大会提案発表資料

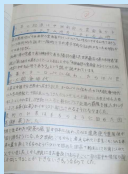
1	2
日本連合教育会研究大会 徳島大会 ー第10分科会ー 学校・家庭・地域社会の連携 研究協議題 夢や希望を持ち、未来に向かって果敢に挑戦する子どもを育む学校・家庭・地域のあり方 徳島県教育会 三好市立井内小学校 住田 克弘	研究協議題について 地域の人や文化との関わりの希薄さからくる規範意識や学力の低下、心の未熟さ 地域の学校・子どもの学びの場づくり
3	4
家庭や地域と手を取り合って 心豊かな子どもをはぐむ教育活動の実践 多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して 徳島県三好市立井内小学校	井内小学校の位置 井内小学校は、徳島県西部の三好市東部に位置し、国道192号線辻から四国山地方面に4kmほど入った中山間地の学校である。豊かな自然と長い歴史や伝統が育むあたたかな人の輪(思いやりのあるおもてなしがある地域) 井内小学校

5 井内小学校校区のようす  井内小学校 井内小学校周辺の町並み  校区を貫く清流 井内谷川  全国たな田百選 下影のたな田 (三好市役所秘書広報課提供)  井川スキー場腕山  ニホンカモシカ	6 井内小学校校区のようす   地滑りで後方の山から流され現在の地に着いたという伝説がある妙理神社 台風、平成16年の洪水をはじめ、土台の岩が揺れても落ちなかったといわれる剣神社
---	--

7 井内小学校児童数の移り変わり  児童数の変化  <table border="1"> <thead> <tr> <th>年</th> <th>児童数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>昭和22</td><td>1076</td></tr> <tr><td>32</td><td>793</td></tr> <tr><td>42</td><td>539</td></tr> <tr><td>52</td><td>196</td></tr> <tr><td>62</td><td>123</td></tr> <tr><td>平成9</td><td>81</td></tr> <tr><td>19</td><td>37</td></tr> <tr><td>26</td><td>18</td></tr> </tbody> </table> 児童数の減少・地域の過疎化高齢化に直面した地域でもある。	年	児童数	昭和22	1076	32	793	42	539	52	196	62	123	平成9	81	19	37	26	18	8 地域との連携の必要性 ・少人数であるため全員仲良く責任と協力の意識がある。上級生から学ぶ下級生。 ・人々と出会い・ふれ合ったり切磋琢磨したりすることが少ない。 ・コミュニケーション能力を向上させる機会が少ないこと。 ・子ども同士の位置や関係が決まってしまうこと。 ↓ 学校・家庭・地域の教育力を活用し、多様な経験の中で、自己実現をはかり、地域を愛し、感謝の気持ちを持たせるために、体験を通じて学ぶ場を設定することが最も効果的である
年	児童数																		
昭和22	1076																		
32	793																		
42	539																		
52	196																		
62	123																		
平成9	81																		
19	37																		
26	18																		

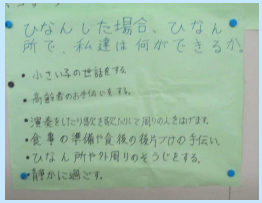
9 学習の中での地域とのつながり ・防災マップ5・6年 校区内でかつてあった災害や被害、保護者が危険を感じる場所を書いてもらい地図にまとめたり、災害時に、どんな備えが必要か、また、自分たちが人々の役に立てることは何かを考えたりした。  	10 地域に伝わる民話を調査し劇化した3・4年 井内の豊かな歴史と伝統について知り、長い歴史の中で育まれた井内の人々の心や思いにふれた。 井内の長者屋敷  
---	---

1 1	1 2
地域に住む人々との交流を通じて 学習を進めた 1・2年  こんにゃくづくり体験  高冷地野菜栽培見学	「お茶」についての学習 平成25年度は、茶摘み体験・茶工場見学等を通じて、働く人の思いなどについて各学年でまとめた    

1 3	1 4
平成26年度 全校一斉に茶摘み・手もみ体験をし、学年に応じてまとめている。     	運動会 「見てくれる人がたくさんいて、張り合いがある。」  長寿クラブ・婦人会・PTA各団体代表者との運営委員会  手をつないでの入場行進  運動会参加団体の打ち合わせ  代表者による宣誓

1 5	1 6
「普段はあいさつがしなない人たちといっしょに演技ができてうれしかった。」    	6年生を送る会 (地域サークルの発表)  交通安全教室 (愛輪クラブ)  愛校奉仕作業  プール掃除 (保護者、PTAのOB) 

1 7	1 8
消防年末警戒 (消防団との連携)   親子料理教室 保護者・生活改善グループ 生活改善グループの方々と親子料理教室で井内の伝統家庭料理を作った。 	PTA活動の中で  保護者とOBによる手前味噌劇団 1ヶ月も前から夜遅くまで練習し、卒業生の心に残る劇を演じている。  スキー学習では、子どもたちのサポートをしたり、インストラクターのアシスタントをしたりして、スキーを滑る楽しさをすべての児童が感じるように補助している。  親子スポーツ大会(ドッジボール)では子どもたちは全力で大人にぶつかっていき、大人は高学年の成長をうれしそうに受け止めた。

1 9	2 0
実践の成果 ・地域や保護者の学校や子どもたちに対する思いに支えられて子どもの学ぶ場ができています。 ・ねらい、方法、活動の練り合わせ協議による充実した活動の実現。 ・学校、家庭、地域のつながりの強化・交流の促進。  	今後の課題 1 教えてもらう、共にする活動から、いろいろな語り合いの中で心のふれあいを深められる活動への進化をはかる方策、企画。 2 子ども自身が地域の中で人の役に立っているという実感をさらに強く持ち、地域が一体になって取り組む防災訓練。 

2 1	
今後の課題 3 学校を地域の中核として地域の人や団体を結ぶ拠点にし、相互交流の中で、子どもを育てることを目標にすえ、その共通の目標の達成を目指すことを通じて井内を元気にしていくことができる連携のあり方。 	

研究主題

豊かな心と，自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ～学校図書館教育を中心として～

三加茂中学校 教諭 山下ちづる

1 はじめに

本校のある東みよし町は，吉野川をはさんだ豊かな水と緑に囲まれた場所である。校区は近年国道192号線沿いに商業施設や飲食店が立ち並び，人や物の交流連携の拠点として，発展が期待されている。過疎化が進む徳島県西部においても活気のある地域となっており，人口減少が比較的緩やかである。

三加茂中学校は，昭和36年に三庄中学校・加茂中学校が統合して創立され，平成13年に現在の校舎に新築移転した。学校の校訓は「創造」で，教育目標は「一人ひとりの自主性・社会性・創造性を発展させるとともに，人権を尊重し，個性の伸長と豊かな人間性の育成に努める」ことである。

全校生徒は248名で，学級数は11学級である。加茂小学校と三庄小学校の2つの小学校から入学してくる生徒達は，明るく活発であり，意欲的に学校行事や部活動に取り組んでいる。

三加茂中学校の学校図書館は，別棟の東みよし町立図書館の2階にあり，校舎からは，長い渡り廊下でつながる構造になっている。

このため生徒たちは，学校図書館と町立図書館の，両方を利用しながら読書活動が行える，という恵まれた環境にある。

2 研究の目的

そこで，「未来を見つめ，豊かな学びを創造する中学校教育の創造」という研究主題のもと，学校図書館教育を中心とした研究を構想した。



東みよし町三加茂地区



三加茂中学校正門



東みよし町立図書館



昼休みに町立図書館を利用する生徒

具体的なめざす生徒像として、

①「読書活動を通して自らの考えを広げ、豊かな心を持つ生徒」

②「図書館を通して情報活用能力を身につけ、課題を解決できる生徒」

③「主体的、意欲的に学び、ともに高めあう生徒」

の三つを考えた。学校図書館を通して、豊かな心と自ら学ぶ力を持つ生徒の育成をはかっていく。

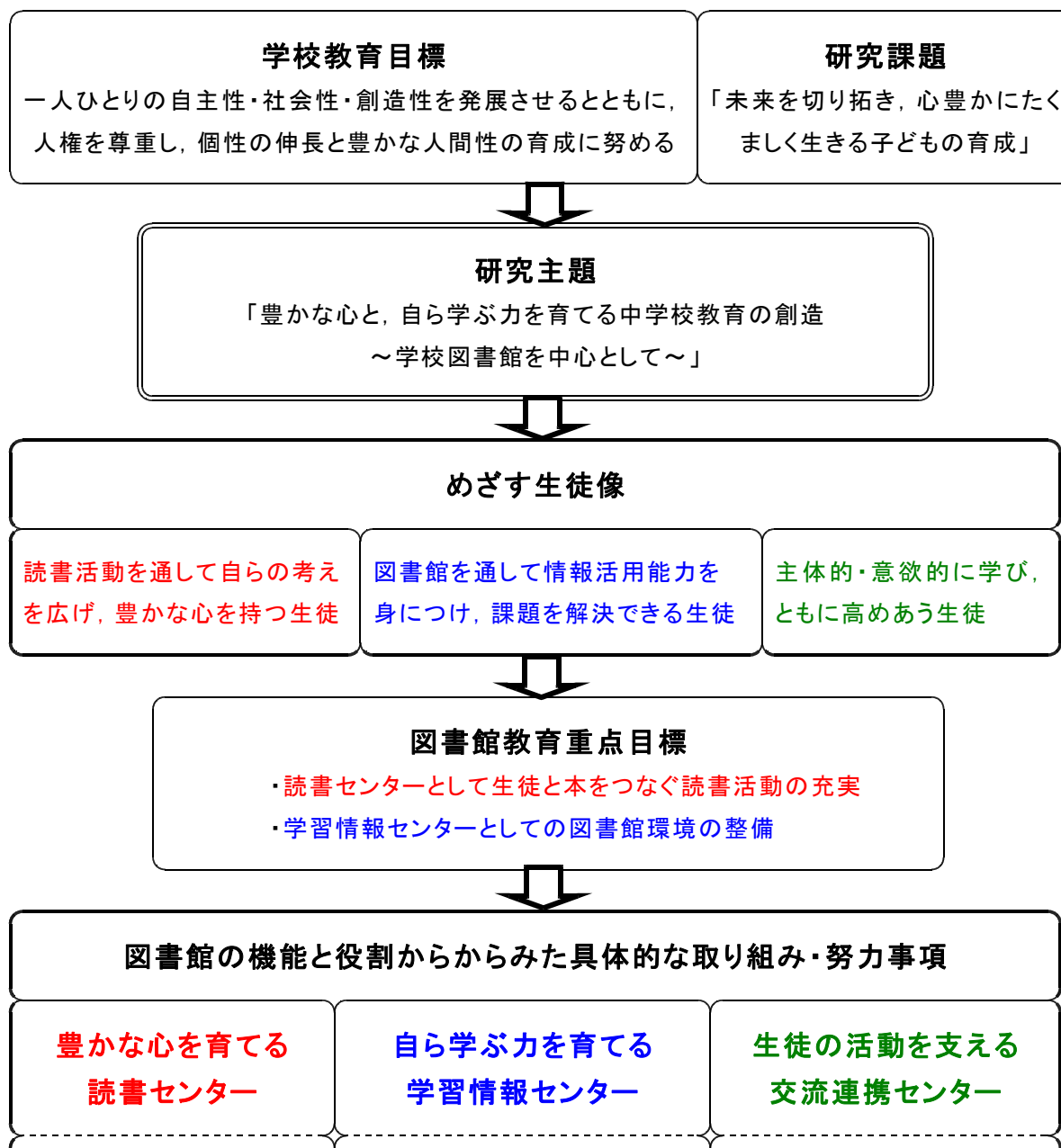


昼休みに学校図書館を利用する生徒

3 調査研究の概要

(1) 研究の構想

研究の全体構想を図に示すと、次のようになる。



生徒の「読みたい」をはぐくみ応える学校図書館	生徒の「知りたい・学びたい」を引き出しいかす学校図書館	図書を通して家庭・地域・公共図書館とつながり広がる学校図書館
・朝の全校一斉読書 ・絵本の読み聞かせ ・学級文庫 ・個人の読書記録ファイル ・新着図書紹介 ・おすすめ本の紹介 ・推薦図書 ・図書のリクエスト ・図書館の配架や展示の工夫 ・校内の読書環境整備	・図書館の利用指導オリエンテーション ・各教科における年間利用計画 ・調べ学習の仕方の指導 ・図書館資料を使った授業の研究と実践 ・ICTを活用した資料の収集整理 ・図書資料のレファレンス ・蔵書検索システム ・蔵書の点検と充実	・東みよし町立図書館との運営および資料連携 ・県立図書館の団体貸出の利用 ・地域の読み聞かせボランティア・町コミュニティ・スクールとの連携協力 ・図書だよりによる広報活動 ・図書システムによる蔵書管理と運営 ・読書実態調査アンケート

図書館教育における重点目標として

- ・「読書センターとして、生徒と本をつなぐ読書活動を充実させること」
- ・「学習情報センターとしての、図書館環境の整備をすること」の二つを設定した。

また、学校図書館の機能と役割を、次の三つの点に分けて考え、具体的な取り組みや努力事項を考えた。

①「豊かな心を育てる読書センター」としての機能を持つ学校図書館

生徒の「読みたい」という気持ちをはぐくみ、それに応える学校図書館として、読書活動の活性化と充実を目指すこと。

②「自ら学ぶ力を育てる学習情報センター」としての機能を持つ学校図書館

生徒の「知りたい・学びたい」という気持ちを引き出して、それをいかしてゆく学校図書館を目指すこと。

③「生徒の活動を支える交流連携センター」としての機能を持つ学校図書館

図書を通して家庭・地域・公共図書館とつながり、広がってゆく学校図書館を目指すこと。

(2) 読書アンケート調査の結果から

2013年度の4月に、全校生徒を対象に行った本校の読書アンケートの調査結果は、以下のと



読みたい本を探す生徒



県立図書館から団体貸出を受けた図書

おりである。

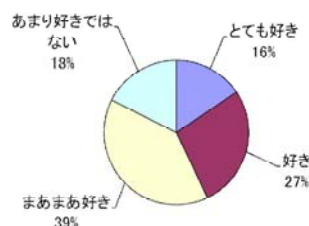
「本を読むのは好きですか？」という質問には、「とても好き」「好き」「まあまあ好き」と答えた生徒が、あわせて約8割になった。

本を読むことに対して「どちらかという」と好きである」と、とらえている生徒が多いことが分かる。

あわせて、よく読む本の種類を聞くと、小説が大半を占めた。「冒険・ファンタジー」や「ホラー・ミステリー」「推理小説」「恋愛小説」という回答順だった。

次に、「友だちや家族と本について話をしますか？」という質問には、「よくする」「ときどきする」という回答が、あわせて約3割にとどまった。「あまりしない」「ほとんどしない」という回答は約7割を占めた。

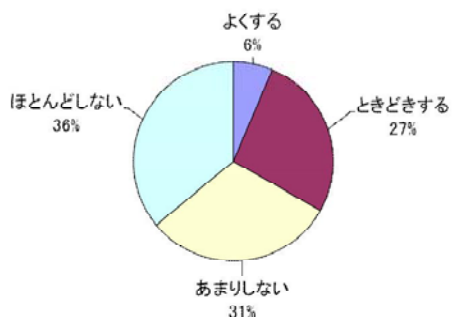
① 本を読むのは好きですか



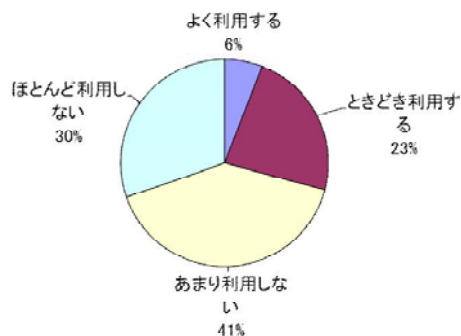
② あなたが読む本の種類は何ですか(複数回答)



③ 友だちや家族と本について話しますか



④ 学校の図書館をよく利用しますか

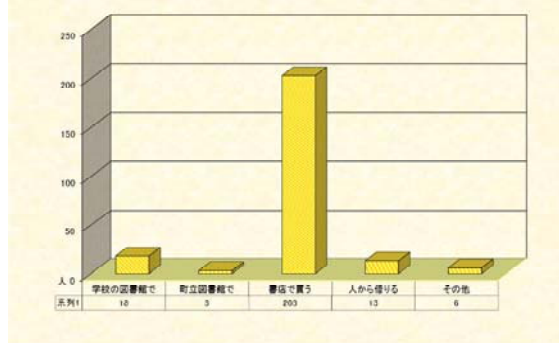


これは、「学校の図書館をよく利用しますか？」という質問に対する、回答結果の割合とよく似た傾向が見られた。

また、本校では毎日8:05～8:20までの15分間に、全校一斉の朝の読書を実施している。この「朝の読書で読む本は、どのように準備していますか？」という質問に対して、「書店で買う」と答えた生徒が大多数をしめた。町内に大型書店があり、本が比較的手に入りやすいという環境要因がある。

次に、「朝の読書の時間以外に、本を読むのはいつですか？」という質問に対しては、「休みの日に家で読む」と答えた生徒が一番多かった。

⑤ 朝の読書で読む本はどのように準備していますか



これらのアンケートの結果から、本を読むことはどちらかというと好きであるが、本に関する知識や感想を共有する機会があまりなく、図書館の利用も限られている、という傾向がうかがえた。

4 具体的実践の紹介

(1) 絵本の読み聞かせ

読み聞かせは、取り組んでいる学校も多いと思われるが、本校でも、毎週水曜日の朝の読書の時間に、絵本の読み聞かせを行っている。

先生方が自分のお気に入りの絵本や、町立図書館で団体貸出をしていただいた絵本から選んで読み聞かせをしている。

また、先生方の他に、地域の読み聞かせボランティアの方も、毎月第1・第3水曜日に来ていただいている。東みよし町には、「おはなし・どんぐりの会」があり、町立図書館を拠点に「おはなし会」などの読み聞かせを中心とした活動をしている。

それから、校内研修として鳴門教育大学の余郷裕次先生をお招きし、読み聞かせの方法や意義について教えていただいた。

また、保護者を対象とした家庭教育学級の講演会では、ちょんせいこ先生に読み聞かせのワークショップをしていただいた。

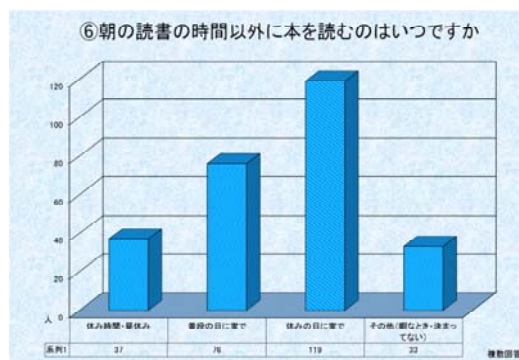
生徒に印象に残っている絵本についてアンケート調査をすると、「自分が普段読まない本を読んでくれるので、面白い。」と好評だった。生徒達は真剣に、ときには笑い声をあげながら聞いている。

題名	人数
犬の日	15
おめおめまんがのついで	14
ずきんまじろ	7
犬 きのこいぬ	6
ハロディ ぼくは私のピアノ	5
おめおめまんがのついで	3
セウーパースタイル	3
あふりんのアワー	2
じいさんのうさぎ	3
おめおめまん	3

読み聞かせアンケート結果



絵本のあしあと



先生がお気に入りの絵本を読み聞かせ



余郷裕次先生の読み聞かせ講座



読み聞かせを真剣に聞く生徒

各クラスには、読み聞かせに使用した絵本の表紙写真を記録した「絵本のあしあと」を掲示している。

(2) 読書啓発活動

読書啓発活動として、図書委員会を中心にいろいろな本の紹介をしている。

まず、各クラスにある学級文庫の選定は図書委員が行っているが、新着図書を中心に定期的に入れ替えるようにしている。朝の読書の時間には、学級文庫の本を読む生徒も増えている。



全校集会でのブックトーク

また、全校集会では図書委員がブックトークを行った。UFOと宇宙人を登場させて、星新一のSFの本を楽しく紹介した。

そして、各学年の廊下や図書館では、図書委員のおすすめの本の企画展示や、学年別のおすすめ本の展示を定期的に行っている。

本を常に身近な場所に置くことで、生徒たちは休み時間に気軽に本を手にとることができ、新しい本の世界を知ることができる。



「私のおすすめの一冊」

また、国語の時間には、「私のおすすめの一冊」として、自分の好きな本を紹介する文章を書いた。書き上げた「おすすめの一冊」は学年掲示板の掲示物として利用したり、各クラスでブックトークをしたりして紹介し合った。

生徒たちは、友達の紹介した本に対して、「その本、後で貸してよ。」と声をかけ、興味を示していた。

また、生徒が持っている読書記録ファイルには、自分が読んだ本を記録している。同時に、これから読みたい本のリストを書き留めるようにしている。読みたい本が増える読書ファイルになって欲しい。



図書委員のオススメ本



学年別おすすめ本の廊下展示



新しく並んだ本に興味津々



各クラスでのブックトーク



友達が選んだ本は面白そう



職員室前の先生方の推薦図書

また、先生方にも生徒に読んでもらいたい本を、図書館の本から推薦図書として選んでいただき、職員室前に展示をしている。

そして、職員朝会では、日直の先生が他の先生方に自分の好きな本を紹介する時間を取り、「チーム三加茂おすすめの一冊」としてまとめた。

2013チーム三加茂 おすすめの一冊

順位	著者	書名	推薦者
1	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
2	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
3	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
4	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
5	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
6	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
7	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
8	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
9	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
10	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
11	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
12	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
13	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
14	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
15	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
16	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
17	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
18	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
19	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
20	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
21	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
22	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
23	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
24	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
25	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
26	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
27	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
28	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
29	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆
30	山崎 隆	人生のマネジメント	山崎 隆

「チーム三加茂おすすめの一冊」

それから、図書委員が春と秋の読書週間にしおりを作って配ったり、POPをつくって、本と一緒に掲示したりしている。POPとは、本の内容を宣伝した、手書きの広告である。



手作りのしおり



本のPOP

その他に、読書講演会として、三加茂中学校の卒業生である作家の喜多喜久さんをお招きしてお話を伺った。「人生のマネジメント」と題して、作家としてデビューするまでの経緯を詳しく語っていただいた。講演の後、生徒から活発な質疑応答があり、著作を



寄贈図書を受け取る

図書館に寄贈していただいた。



喜多喜久さんの読書講演会

(3) 各教科における利用の具体例

総合的な学習の時間には、図書館資料を使って活動をする機会が多いと思われる。

1年生の総合的な学習の時間には、修学旅行の事前学習として、平和学習を行った。戦争と平和に関する絵本を使って、平和の尊さを学んだ。発表会では、平和の絵本の概要をICT機器を使って提示した。



1年生 平和学習の発表会

また、2年生の総合的な学習の時間では、進路学習を図書館資料を使って行った。職業や職場体験学習・進路選択に関する図書館資料は、学校図書館に多くある。生徒達は自分の興味のある職業について調べ、まとめた事柄をポスターセッションで発表した。



2年生 進路学習の発表会

そして、3年生では、学級活動において「心に響く言葉」を本から集めて、アンソロジーを作る取り組みをした。アンソロジーとはいろいろな詩歌や文章を集

めてまとめたものである。

1学期は「自分や仲間への応援メッセージ」というテーマで言葉を集めて、夏季総体前に学年掲示板に掲



各部活動の応援メッセージ
みんなで支え合って乗り越えていこうと確かめ合った。

次に、2年生の国語科では、古典単元の学習において、祖谷地方に残る「平家落人伝説」について調べた。三好地域の郷土資料や、観光案内パンフレットから情報を集めて、郷土に残る平家落人伝説についてまとめて発表した。平家物語と比較することでより理解が深まり、生徒の興味関心を引き、古典を身近なものと感じることができた。

1年生の社会科では、歴史分野の学習で、自分の好きな歴史上の人物について調べ学習を行った。興味のある人物に関して歴史の図書資料から情報を集めてまとめた。



英語科 英語でおすすめの場所を紹介する掲示物を作って発表会を行った。

3年生の家庭科では、幼児とふれあう保育実習の前に、幼児に選ぶ絵本を考える授業を行った。子どもの発達段階と年齢に応じた絵本を考えて、発表を行った。その後、町立図書館でたくさんある絵本の中から、実際に自分たちで絵本の選定をした。選んだ絵本を読む練習を事前にしてから、保育実習にのぞんだ。



3年生 アンソロジーの発表会



国語科 平家落人伝説について



社会科 歴史上の人物について

2年生の英語科では、日本と世界のおすすめの場所を本から探して、英語で紹介する学習を行った。地理の本や旅行雑誌から情報を集めて整理し、英語で紹介



家庭科 保育と絵本

そして各学年の美術科では、自分の好きな本を題材にして、平面と立体の作品を作った。

1年生は本のPOPを作った。2年生は、ポップアップカードを作った。カードを開けると、本の中の場面が飛び出してくる楽しい仕掛けがある。3年生はパソコンを使っ



美術科 本のブックカバー

この他、1年生は、4月に図書館のオリエンテーションを受ける。同じ東みよし町内でも、1階にある町立図書館を利用したことのなかった生徒がたくさんいた。利用者カードを発行してもらい、学校図書館にはない種類の本をおめあてに、昼休みに利用するようになった。また、総合的な学習の時間には、クイズ形式で調べ学習の仕方を学んだ。

このように図書館の利用の仕方を学び、身近なものと感じることで、読書活動や図書館資料を活用した学習につなげていく。



美術科 本のPOP

て、本のブックカバーを作った。



美術科 本のポップアップカード

生徒たちは、各教科での学習を通じて、普段は自分から手にする事のない種類の本を読むことで、新たな発見や興味が広がったようである。



1年生 図書館オリエンテーション

(4) 図書館資料とICT機器を利用した授業の取り組み

図書館資料とICT機器を利用した授業の取り組みも始めている。図書とICTの双方の利点を活用して、生徒の情報活用能力の育成をはかりたいと考えている。

昨年度は、パナソニック教育財団の実践研究助成の指定を受け、タブレット型PCを18台導入した。職員研修でタブレット



ICT支援員によるタブレットの活用指導力向上研修

型PCの活用指導力向上研修を行い、生徒の調べ学習に活用できるようにした。



充電は大切



図書館でタブレットを利用する生徒

また、無線LANが使用できるようにICT支援員の協力を得て、セキュリティも含めた校内のインターネット環境を整えた。

2年生の総合的な学習の時間における職業調べでは、生徒たちは、集めた情報をもとにプレゼンテーションソフトで視覚的に工夫された資料を作った。まとめるときに文章だけでなく、図表やグラフを自ら作成し、限られたプレゼン時間の中で分かりやすく提示した。

また、同じく「伝統芸能」について調べるときには、地域の聞きとり学習にタブレット型PCを持参した。インタビューや芸能の様子を、聞き取り先の許可を得て、静止画と動画で記録することができた。

(5) 各団体との連携協力

これらの学習では、多種多様な図書館資料が必要となってくる。本校の蔵書冊数は約1万冊だが、充分とはいえない。

そこで、町立図書館や徳島県立図書館の協力貸出をお願いした。町立図書館には約2万冊の蔵書がある。

また、町立図書館は「とくしまネットワーク図書館システム」に加入しており、毎週金曜日に文化の森の県立図書館から協力車がやってきている。総合的な学習の時間の調べ学習や各教科で使う図書資料の団体貸



情報の整理と視覚化



タブレットで画像を撮影



町立図書館の蔵書は約2万冊



県立図書館の本の団体貸出



町立図書館の選書委員会

出をお願いした。

これまでに修学旅行や国語の古典、偉人の言葉、伝統芸能、職業調べなどをテーマに、1カ月間図書をお借りした。授業で使いたいけれど、学校図書館にはない図書のレファレンスに応じていただき、とても助かっている。

そして、町立図書館とは図書運用システムが共有化されている。そのため、学校図書館のパソコンから両図書館の蔵書3万冊を一度に検索することができる。

また今年度から、本を購入する際の選書委員会にも参加させていただいた。生徒たちからリクエストのあった本を、購入候補リストに加えることができた。

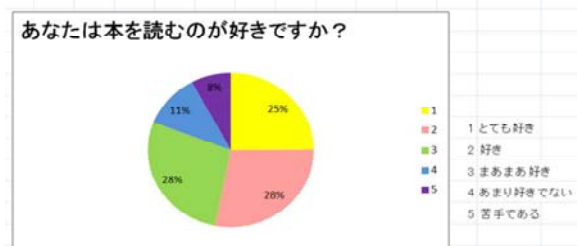


蔵書検索システム

また、東みよし町では、昨年度から町内6つの小中学校をコミュニティ・スクールに指定し、「学校・保護者・地域の連携」を具体化して、地域の人材活用をはかる取り組みを行っている。すでに行われている読み聞かせボランティアの他にも、学校図書館支援員など、地域や保護者の力をお借りして、図書館教育を広げることができる。

5 研究の成果と課題

年度末に実施した読書に関するアンケートの結果では、「本



を読むのが好きですか」という質問に対して、



東みよし町広報のCSだより

「あまり好きでない」と答えた人の割合は、変化が見られなかった。しかし、「とても好き」と答えた人が9ポイント増加していた。

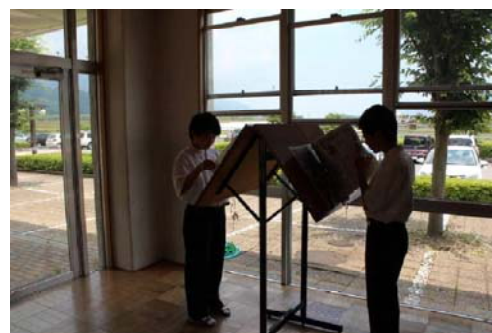
そして、重点目標の一つ目の「読書センターとして、生徒と本をつなぐ読書活動の充実」という点については、図書館の利用者数や貸出冊数の増加があった。生徒たちは、いろいろな本の情報を得て、実際に本に触れることで、読書内容も広がっていった。

また、重点目標の二つ目の「学習情報センターとしての、図書館環境の整備」という点については、他団体との連携協力もあり、図書館資料とICTを活用した図書館の利用が増えた。それに伴い、図書館教育の年間運営計画や、各学年・教科ごとの年間利用計画の見直しをはかる必要性も出てきている。

また、今後は図書館で、新聞を教育活動に取り入れるNIEにも取り組んで行きたいと考えている。まだ取り組み始めたばかりであるが、新聞を生徒たちの身近な所に置き、親しむことから始めて、今後は教科学習にも利用していきたいと考えている。



ICTと図書を活用する生徒



廊下で新聞を読む生徒



樹齢1000年の加茂の大クス



新聞記事の掲示板「NIEの窓」

小中連携教育～東祖谷小中学校の取り組み

東祖谷中学校 教諭 岡本博一

1 はじめに

平成24年4月、旧東祖谷山村（現三好市東祖谷）の5つの小学校が統合され、東祖谷小学校が開校し、小中一体型校舎で東祖谷小中学校の連携教育がスタートした。昭和48年に実質統合された東祖谷中学校のあった現在の敷地に木造の小中一体型校舎が建築され、小中連携教育も始まったわけである。その連携教育も今年で3年目となるが、当初は小中の文化の違いなど、連携を進める上で、さまざまな苦労があったようである。

本年度4月より東祖谷中学校で勤務することとなり、中学校の教務主任として学校運営に関わってきたわけだが、その取り組みの中で見えてきた成果や課題についてまとめてみた。その中で小中の連携、特に組織づくりや校内研修、乗り入れ授業についてと、東祖谷小中学校の教育を支えている東祖谷という地域の特性を生かした教育活動等について述べる。

2 本校の概要

【平成26年度 東祖谷小中学校の児童生徒職員数】					
小学校……44名					
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
7名	6名	7名	3名	13名	8名
中学校……20名					
1年生	2年生	3年生			
8名	7名	5名			
教職員	20代	30代	40代	50代	計
小学校	6	0	3	3	12(4)
中学校	3	1	4	2	10(4)
計(小・中)	9	1	7	5	22

現在、小学校全校児童44名、中学校全校生徒20名である。児童生徒は、毎朝スクールバスで登校しており、木の香りがただよう素晴らしい環境の中で教育活動を営んでいる。中学校の部活動は卓球部と柔道部があり、全員どちらかの部活動に所属している。

地元の教員（計の（ ）内が地元教員数）が少なくなっており2～3年で異動する教員が多く、教育の定着も課題の一つと言える。



旧東祖谷中学校の校舎



現在の東祖谷小中学校の校舎

3 本校の子どもたちと学校教育目標

校区に高等学校のない本校の子どもたちは、東祖谷中学校を卒業と同時に自分の家を離れて寮生活や下宿生活をしなければならない。

もともと東祖谷中学校には生徒の寄宿舎「友愛寮」があった。東祖谷の各小学校を卒業した子どもたちは、中学校入学と同時に「友愛寮」に入寮し、寮生活をしていた。東祖谷中学校は平成16年まで全寮制であったが、平成16年3月に友愛寮が閉寮となり、スクールバスでの登下校が始まった。要するに平成16年まで東祖谷の子どもたちは、小学校卒業と同時に自宅を離れ寮生活を送っており、中学校卒業と同時にふるさと東祖谷を離れ寮生活や下宿生活をしていたわけである。

現在は中学校卒業まではスクールバスで自宅から通学できるが、高校進学と同時に自宅を離れなくてはならない現実は以前と変わっていない。したがって、中学校を卒業する「15歳の春までにどのようにして自立できる力を育てるか」ということは、本校の学校教育の大きなテーマである。

そこで本年度は、学校教育目標を「ふるさと東祖谷での学びを生かし、たくましく自立できる子どもの育成」とし、小学校6年・中学校3年の計9年間の学びの中でどのような教育活動を展開し、どのようにして自立できる力を育てるかということを教育課題とし、次の3つに重点をおくこととした。

- ①進んで学習に取り組む人に
- ②気持ちのよいあいさつができる人に
- ③夢・目標が持てる人に

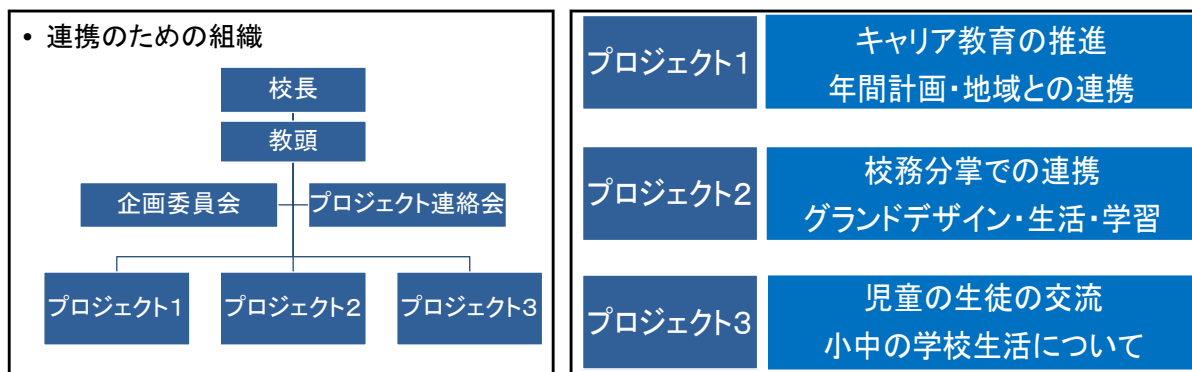
このような目標に向かって全教職員が共通理解し、教育活動を展開している。そのために学校要覧に示したグランドデザインが次のようになる。



4 小中連携について

(1) 組織づくり

小中連携教育をすすめるために小中の全教職員が3つのプロジェクトチームに分かれて校内研修を行っている。それぞれのプロジェクトの担当内容は次のようになっている。



①プロジェクト1～キャリア教育の推進・年間計画作成・地域との連携

キャリア教育を進める上で小学校から中学校まで、それぞれの学年で指導するときに指導者側がもっておきたい視点を示した「キャリア教育の視点を取り入れた基礎的・汎用的能力」の一覧表を作成している。一覧表には発達段階に応じて児童生徒に身につけさせたいキャリア教育的視点の能力が示しており、その視点を指導者側がもって指導にあたる。



県教育長さんの講演を聞く小5・6年生と中学生

具体的な取り組みとしては、東祖谷出身の方を講師としての講演会を行っている。昨年度は前三好市長、本年度は1学期に県教育長を迎え「ようこそ先輩」と題して講演会を実施した。また、中学校では2学期に県教育委員会のキャリア教育出前授業を希望し、阿波製紙による出前授業を実施した。このような取り組みを通して、児童生徒に夢や目標をもつことの大切さを考えさせている。

【「声のものさし」 小学校低学年掲示用(左) と 小学校高学年・中学校掲示用(右)】



②プロジェクト2～グランドデザイン・校務分掌・生活・学習

プロジェクト2は小中の教職員の交流を中心に研修を進めている。1学期にグランドデザイン（3本校の子どもたちと学校教育目標に提示）を作成した。また、現在別々になっている校務分掌を一元化し、小中で一つの校務分掌表になるように素案を作成中である。

その他、学習面や生活面での取り組みとして、「声のものさし」（前ページに提示）、「学習技（わざ）カード」等を小学校低・中・高学年用、中学生用と分けて作成し、小中で一貫した指導ができるよう共通理解を図っている。

③プロジェクト3～児童生徒の交流・学校生活

プロジェクト3は児童生徒の交流をどう進めるかということに重点をおき研修を行っている。本年度も連携ありきという姿勢で取り組んできた。その活動内容は、集会や学校祭、学習発表会、避難訓練、運動会等、大小さまざまなものとなった。

*****小中で連携した主な行事*****

- | | |
|-----|-------------------------------------|
| 4月 | 小中合同入学式・小中合同避難訓練 |
| 5月 | クリーン活動（国道のゴミ拾い） |
| 6月 | 食育集会 |
| 7月 | ようこそ先輩（小5・6，中）
人権問題意見発表会（小5・6，中） |
| 9月 | 学校祭・園小中連合運動会
園小中合同避難訓練 |
| 10月 | ジャズコンサート・平家まつり
ドクターヘリ見学会 |
| 11月 | 心の健康教室（小6・中）
学習発表会 |
| 12月 | マラソン大会・人権集会
生徒会役員選挙（小6・中） |



小中合同の入学式



こども園・小・中の連合運動会



読み聞かせをする中学生



生徒会選挙で投票する小学生

上の表に示した活動以外にも中学校の委員会活動で、図書委員会が昼休み等を利用して小学生に読み聞かせを行ったり、保健給食委員会が小学生に手洗い指導を行ったりしている。

また、定期的に小中交流給食を実施し、小学生と中学生の交流を図ったり、生徒会役員選挙では小学校6年生にも立ち会い演説会に参加してもらい投票権を与えている。

今年度は、「やれるものはやってみよう」と取り組んできたが、検討する余地があると考えている。

(2) 乗り入れ授業

本校では小学校の教員が中学校の授業に、中学校の教員が小学校の授業に乗り入れ授業を行っている。具体的には次の表に示すとおりである。

学 年	教科	担当者
中学校全学年	音楽	小学校の教諭
中学校1年生	国語	小学校の教諭
小学校6年生	社会	中学校の教諭
小学校5年生	国語	中学校の教諭
小学校5年生	算数	中学校の助教諭 TT
小学校6年生	家庭	中学校の助教諭
小学校4～6	図工	中学校の助教諭
小学校5・6	英語	中学校の教諭
小5・6, 中1	合同体育	小・中学校の教諭

乗り入れ授業がわかる職員室の黒板

乗り入れ授業がわかるように職員室の黒板には毎日の計画を掲示している。小学校と中学校の教務主任は次の週の時間割や出張・行事等を毎週確認し打ち合わせが必要となる。また、特別教室は小中で共有しているので、例えば、理科室、音楽室、図工・美術室、家庭科室や体育館、パソコン室や多目的ホールなど、小学校の授業と中学校の授業が重ならないようにしてはいけない。



中学校教諭の授業 小6(社会)

乗り入れ授業の担当教員が出張等で授業変更が必要な場合も教務主任同士の打ち合わせや学級担任や変更する授業担当者との確認が絶えず必要となってくる。



小中の教諭のTT指導(小5・6と中1合同体育)



小学校教諭の授業 中1(国語)

(3) 地域から学ぶ～東祖谷小中学校だからできる教育活動



祖谷衆太鼓の練習



じゃがいもの植え付け



かかしづくり



祖谷そばのそば打ち体験

どの学校にもその地域だからできる教育活動がある。東祖谷小中学校にも「祖谷衆太鼓」や「祖谷そば」の栽培など、東祖谷だからこそできる教育活動がある。

祖谷衆太鼓はもともと旧東祖谷山村の青年団が取り組んでいたものであるが存続が難しくなり、現在は東祖谷小中学校の児童生徒がその伝統を受け継いでいる。総合的な学習の時間に練習を重ね、中学校は学校祭や三好市のイベント「祖谷平家まつり」で、小学校は三好郡市音楽会や学習発表会でそれぞれが披露している。

また、小学校では祖谷地方の特産品である祖谷そばやじゃがいも、こんにやくなどの栽培にも取り組んでいる。種まきや植え付け、手入れや収穫までの作業を行い、収穫したそばでそば打ちをしたり、手作りこんにやくを作ったり、またじゃがいもは伝統料理の田楽にしたりしている。

このような本校ならではの教育活動を支えてくれているのが学校支援ボランティアである。上記以外でも読み聞かせや習字の指導など、多くの活動に支援をいただいております。学校支援ボランティアの協力なくして、東祖谷小中学校ならではの教育活動は成り立たないといっても過言ではない。また、学校支援ボランティアのサポートは教育活動だけでなく施設設備の補修等、さまざまな面にまで及んでいる。

このような活動は地域の素晴らしさを知る機会となり、児童生徒の自尊感情を育てることもつながっている。

5 小中連携教育の成果と課題

(1) 成果について

①小中合同職朝の改善

本校では校長や養護教諭，事務職員などは小中兼務をしている。そこで兼務している教員が小学校の朝の活動に余裕をもって参加できるようにするため，本年度は中学校の職朝を月・水・金の3回とすることにした。また，月曜日は小中合同の職朝をとっているが，必要なときは月曜日以外でも合同職朝の時間をとっている。

②グループウェアの活用

三好市の教育委員会が採用し，市内の各学校とつながっているインターネットを活用したグループウェア「a n d T」や三好教育会のグループウェア「ミライム」も小中の連携に欠かせないものとなっている。スケジュールを確認したり，小中全職員にメールやメッセージで連絡をするなど，小中それぞれの教員が有効に活用している。

③校務での小中連携

報告文書の処理や出張等でも小中の担当教員の間での連携が進んでいる。内容が同じ報告文書であれば担当者同士で相談し，まとめて報告をしたり，出張も小中どちらかの担当が出席すればよいものは，相談しどちらかの担当教員が出席するようにしている。

④小中の学習内容・系統性がわかる

小中が一体型校舎で職員室も同じであることから，小中それぞれの学習内容やつながり，系統性などがよくわかるというメリットがある。

⑤「中1ギャップ」の解消

小学生が中学校の教員や中学生と関わる機会が増えることにより「中1ギャップ」の解消につながっている。小学校高学年での教科担任制導入や小中の教員によるTT指導，小中合同の行事，異学年交流活動等，交流が増えることで効果が出ている。

⑥「向上心」の芽生えと「自己有用感」の育ち

児童生徒が交流する中で小学生が中学生の姿を見て「自分もこうなりたい」という向上心が芽生えていることや中学生も上の学年としての意識が高まったり，自信がつき自己有用感がもてるようになっている。

(2) 課題について

①「9年間の学びと育ち」をつなぐカリキュラムづくり

へき地校では，教員の異動による入れかわりが激しい。「9年間の学びと育ち」をつなぐためにはしっかりとしたカリキュラムを作成しなくてはならない。そして，本年度の連携の取り組みが次年度にスムーズに引き継がれるような土台づくりが重要である。

②連携のスリム化

連携は効果はあるが精選をして行事等をスリム化していく必要がある。例えば中学校の学校祭に小学生，小学校の学習発表会に中学生が出演したが，児童生徒にとってそれでよかったかどうか検討課題である。

③小学校のリーダーを育てる場の確保

6年生がリーダーシップを発揮する場面が少なくなってきたので，小学校のリーダーとしての自覚を育てていく場面が必要である。

6 おわりに～小中連携はしょっちゅう連携が大事

本年度、小中連携教育に取り組んできて、その成果や課題がたくさん見えてきた。連携教育成果を深め、課題を克服していくためにも小学校・中学校の教員がそれぞれの職務の枠を超えて、絶えずコミュニケーションをとっていく必要がある。

確かに、小学校と中学校では児童生徒の発達段階の違いもあり、学習指導や生徒指導でもその指導方法に違いがある。しかし、お互いが共通の教育目標に向かっていくこと、本校であれば「15歳の春」という旅立ちに向かって計画的・継続的な指導を小学校・中学校の9年間でやっていくという目標がある。小中の教員が指導方法の違いを理解し、認め合い、東祖谷の子どもたちを共に育てるという意識をもつことが大切なのである。

そのためには、今まで勤めてきた小学校の感覚、今まで勤めてきた中学校の感覚をリセットし、全く新しい学校に勤務するという教員自身の意識改革が必要である。

本校ではその意識改革のために小中の教員を3つのプロジェクトグループに分けて合同の校内研修を実施し、腹を割って話し合える場を設けコミュニケーションを図ってきた。校内研修だけでなく普段から管理職同士・教務主任同士・生徒指導主事同士・人権教育主事同士等、さまざまな立場や場面での連携が大切となってくる。「小中連携はしょっちゅう連携が大事」ということを忘れず、これからも連携教育を推進していきたい。



雪と青空に映える木造校舎 （2014年12月19日撮影）

複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業

三好教育研究所 研究員 赤堀誠司

1 はじめに

昨年度から2年間、「複式学級における算数科指導の充実」をテーマに研究を進めてきた。大きく分けて、次の4つの課題について研究を深めた。

- ①画一的な時間配分ではなく、直接指導・間接指導の組み合わせ方及び時間配分を検討した「ずらし」のパターンをどのように工夫するか。
- ②「わたり」の目的と「わたり」を行うときの判断基準は何であるか。
- ③間接指導での進行役としての「リーダー」をどのように育成するか。
- ④間接指導の際に、児童をいかに主体的に学習に取り組ませるか。

その中でも、特に④が、複式授業において克服すべき最大の課題であると感じる。そこで、昨年度後半から本年度にかけては、特に、算数科の授業で利用できるパソコンでの教材作成に重点を置いて研究に取り組んだ。教材はすべてパワーポイントを使用して作成している。あくまでも、間接指導の際に、児童がリーダーを中心に主体的に学習を進められることを目的として作成したものである。

2 複式学習における学習過程の「ずらし」のパターン

まず、複式学習における学習過程の「ずらし」のパターンを確認しておきたい。時間配分等で若干違いはあるが、主に、次の5パターンが考えられる。

(パターンA)

A 学 年			B 学 年
課題把握			適応発展
課題追求			課題把握
定 着			課題追求
適応発展			定 着
ま と め			ま と め

これが、一般的なずらしのパターンである。

教師のわたりは、学習活動ごとに両学年を行き来する形をとっている。問題把握の学習活動と課題追究した後の解決（発表）の学習活動に教師が立ち会えるようにずらしを工夫したパターンである。

(パターンB)

A 学 年			B 学 年
課題把握			課題把握
課題追求			課題追求
定 着			定 着
適応発展			適応発展
ま と め			ま と め

両学年が同じ流れのパターンである。

学習内容が多い単元や課題追求にたくさんの時間をとりたい授業の場合に有効である。

学習活動をずらすのではなく、両学年ともに課題把握から始める。

(パターンC)

A 学 年			B 学 年
課題把握			課題把握
課題追求			課題追求
定 着			
適応発展			
ま と め			ま と め

片方の学年には最初に指示を与えるのみで、その後は直接指導を行わないパターンである。

教師が児童とともに操作活動を行う場合や細かな指示を出しながら授業を進めなければならない場合に有効である。

片方の学年が課題追求に時間を要する場合や評価テストを行う場合に実施できる。

(パターンD)

A 学 年			B 学 年
課題把握			適応発展
課題追求			課題把握
定 着			課題追求
適応発展			定 着
ま と め			ま と め

両学年の指導に軽重をつけたパターンである。片方の学年の学習内容が難しい場合や細かな指示を出しながら授業を進めなければならない場合に有効である。

(パターンE)

A 学 年			B 学 年
課題把握			課題把握
課題追求			課題追求
定 着			定 着
適応発展			適応発展
ま と め			ま と め

両学年の間を行ったり来たりする（「小わり」をする）パターンである。

児童が本時の学習の流れを明確に理解できている場合や学習リーダーの誘導で授業が展開できる場合に有効である。

3 パソコンを活用した授業の実際

(1) 研究内容

間接指導においては、課題追求と適応発展に割く時間が多いが、児童が主体となって話し合いを行ったり、定着を図る活動に取り組むことができないかと考えた。そこで、スライドを利用して、児童自らがリーダーを中心として学習に取り組む過程を検討し、教材を作成した。

複式学習のいくつかのパターンに沿って、それらの教材を利用する方法を紹介する。

(2) 授業方法

ア パターンAの授業

最も一般的な、パターンAのずらしの授業である。単元は、3年「かくれた数はいくつ(1)」, 4年「式と計算の順じょ」で授業展開を考えてみた。どちらの学年でも、課題把握から課題追求・定着の段階において、スライドを使った学習を取り入れている。

第3・4学年（複式）算数科学習指導案

1 単元名

3 年 「かくれた数はいくつ（1）」

4 年 「式と計算の順じょ」

2 単元の目標

3 年	4 年
乗法や除法の2要素1段階の逆思考の問題を図を使って解くことができる。	()を用いた四則混合の式について、計算の順序を知り、計算のきまりについての理解を深める。また、式を見て具体的場面を想起したり、説明することができる。

3 単元の評価基準

3 年	4 年
ア【関心・意欲・態度】 絵や図を使って意欲的に問題解決にあたろうとする。 イ【数学的な考え方】 乗法や除法の2要素1段階の逆思考の問題の解決の方法が説明できる。 ウ【技能】 乗法や除法の2要素1段階の逆思考の問題を図を使って解くことができる。 エ【知識・理解】 図による数量の関係の表し方がわかる。	ア【関心・意欲・態度】 式の扱いに関心をもち、()を使って1つの式に表したり、具体的に即して式をよみ取ろうとする イ【数学的な考え方】 式の意味を考え、具体的に即して式の意味を説明することができる。 ウ【技能】 数量の関係を()を使って1つの式に表すことができる。また、()を用いた式や四則混合の式の計算が正しくできる。 エ【知識・理解】 ()を用いた式や四則混合の式の計算の順序をまとめる。

4 指導計画

3 年（全2時間）	評価内容	4 年（全8時間）	評価内容
①何倍かしたとき（1時間）〈本時〉	ア・イ ウ・	①式とその計算の順じょ （3時間）〈本時3／3時間〉	イ・ウ エ
②いくつかにわけたとき（1時間）	イ・ウ エ	②計算のきまり（2時間）	イ・ウ
		③計算の間の関係（1時間）	ア・イ
		④式のよみ方（1時間）	ア・ウ
		⑤たしかめと復習（1時間）	エ

5 本時の学習

（1）目 標

3 年	4 年
乗法の逆思考の問題（ $\square \times a = b$ ）を解くことができる。	加減乗除と()が混合している式の計算の順序を考えて計算し、そのしかたを説明することができる。

(2) 展 開

3 年		4 年	
指導・支援	主な学習活動	主な学習活動	指導・支援
●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター さし絵	①本時の学習課題をつかみ、見通しを持つ。	①プリントで前時の復習をする。 プリント	●前時の学習を想起させながら、問題に取り組ませる。
●さしを使って正確に図をかけるように助言する。 ■（評価ウ）	②ノートに、線分図と関係図をまとめる。	②本時の学習課題をつかみ、見通しを持つ。	●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター
●線分図・関係図をもとに課題解決できるよう助言する。 ■（評価イ）	③課題解決をする。	③計算の順序のきまりを整理する。	●ノートにまとめ、計算の順序のきまりを理解させる。 ■（評価エ）
●線分図・関係図からどのように式を導き出したのかを説明させる。	④自分の考えを発表する。	④課題解決をする。	●計算の順序のきまりに従って課題に取り組むよう助言する。 ■（評価ウ）
●個人差に配慮しながら一人一人が自信が高められるように配慮する ■（評価ア）	⑤練習問題をし、理解を深める。 プリント パソコン モニター	⑤解決した課題を説明する。	●式と計算の順序のきまりを結びつけて説明させるようにする。 ■（評価イ） パソコン・モニター
●次時への学習意欲を高める。	⑥本時のまとめをし、次時の課題をつかむ。	⑥本時のまとめをし、次時の課題をつかむ。	●次時への学習意欲を高める。

(3) 評価及び指導の例

	3 年	4 年
イ	「十分に満足できる」と判断される状況	線分図や関係図をもとに $\square \times 9 = 54$ の $\square$ を求める問題であることがわかり、答えを導き出すことができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	さし絵を示すことで、具体的な場面と線分図をつなげやすくする。
ウ	「十分に満足できる」と判断される状況	四則が混合している計算についてきまりに従ってその計算の順序を考えることができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	式に順序の番号をつけることによって、計算の順序を考えさせる。
	線分図や関係図を正しくかいて問題を解くことができる。	四則の混合している計算についてその計算の順序を考え、説明することができる。
	パソコンを利用して線分図や関係図のかき方を理解させる。	パソコンを利用して、説明のしかたを理解させる。

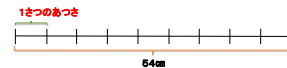
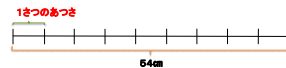
3年「かくれた数はいくつ（1）」で使用するスライド

下のスライドは、課題を提示するものである。課題を、図に表すことを考えさせた後、正しい線分図のかき方を提示し、自分が考えた図と比較させたい。ノートに正しく線分図がかけられるように指導する。

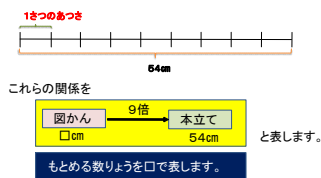
同じあつさの図かんを、本立てにならべます。
9さつで、はば54cmの本立てがちょうどいっぱいになりました。
この図かん1さつのあつさは何cmですか。

同じあつさの図かんを、本立てにならべます。
9さつで、はば54cmの本立てがちょうどいっぱいになりました。
この図かん1さつのあつさは何cmですか。

同じあつさの図かんを、本立てにならべます。
9さつで、はば54cmの本立てがちょうどいっぱいになりました。
この図かん1さつのあつさは何cmですか。

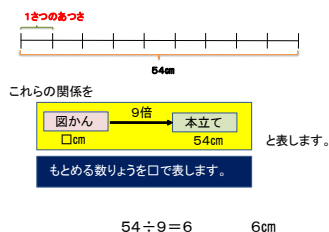


ヒント 図かん1さつのあつさの9倍が本立てのはばです。



線分図が正しくかけたら、関係図のかき方を指導する。もとめる数量を□で表すことを理解させ、正しく関係図をかけるようにさせたい。

線分図・関係図ともに、児童が初めて学習する内容であるので、時間をかけて指導にあたりたい。



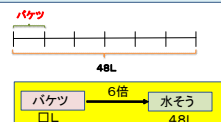
線分図・関係図から、自分の力で式を立て、課題解決にあたらせる。その後、どのように考えて式を導き出したのかを説明させるようにする。

練習問題でも、線分図・関係図を正しくかいて、問題解決にあたらせるようにしたい。

バケツで水を運んで水そうをいっぱいにします。
6回運んで、48Lはいる水そうがいっぱいになりました。
バケツには何Lの水がはいりますか。

バケツで水を運んで水そうをいっぱいにします。
6回運んで、48Lはいる水そうがいっぱいになりました。
バケツには何Lの水がはいりますか。

バケツで水を運んで水そうをいっぱいにします。
6回運んで、48Lはいる水そうがいっぱいになりました。
バケツには何Lの水がはいりますか。



$48 \div 6 = 8$ 8L

4年「式と計算の順じょ」で使用するスライド

色々な計算のまじっている式では、計算の順じょは、次のとおりです。

- ふつう、**左から**順にします。
- () があるときは、() **の中をさき**にします。
- +, − と, $\times$, $\div$ とでは、 **$\times$, $\div$ をさき**にします。

まず最初に、色々な計算がまじっている式での計算の順じょを理解させる。

このスライドをノートにまためさせることにより、きまりを理解させたい。

② $4 \times (7 - 6) \div 2$

課題を提示し、自分で説明をしながら、答えを導き出せるようにさせる。

計算の順じょのきまりに従って、説明をできるように事前指導する。

下のスライドは、正しい説明のしかたを示したものである。自分が考えた説明のしかたと比較させ、正しい説明のしかたを理解させたい。

② $4 \times (7 - 6) \div 2$

() があるので、 $7 - 6 = 1$ の計算をさきにします。

② $4 \times (7 - 6) \div 2$

() があるので、 $7 - 6 = 1$ の計算をさきにします。

次に、左から $4 \times 1 = 4$ の計算をします。

② $4 \times (7 - 6) \div 2$

() があるので、 $7 - 6 = 1$ の計算をさきにします。

次に、左から $4 \times 1 = 4$ の計算をします。

最後に、 $4 \div 2$ の計算をします。

② $4 \times (7 - 6) \div 2$

() があるので、 $7 - 6 = 1$ の計算をさきにします。

次に、左から $4 \times 1 = 4$ の計算をします。

最後に、 $4 \div 2$ の計算をします。

答は2です。

② $4 \times (7 - 6) \div 2$

$$4 \times (7 - 6) \div 2 = 4 \times 1 \div 2$$

$$= 4 \div 2$$

$$= 2$$

これをかきわすれないように！

説明ができれば、それを1つの式にかけるよう指導する。説明はできても、それを式に表すことが困難な児童が多い。計算した箇所だけでなく、式全体をかくことを忘れないよう指導を徹底する。

その後、いくつかの練習問題をさせる。計算の順じょを説明しながら、答えを導き出させる。また、その思考過程を正しく式に表せるようにさせたい。ここでは、1例だけ紹介する。

③ $(4 \times 7 - 6) \div 2$	③ $(4 \times 7 - 6) \div 2$ ()の中をさきに計算するけど、$\times$とーがあるので、$4 \times 7 = 28$の計算をさきにします。	③ $(4 \times 7 - 6) \div 2$ ()の中をさきに計算するけど、$\times$とーがあるので、$4 \times 7 = 28$の計算をさきにします。 次に、$28 - 6 = 22$の計算します。
③ $(4 \times 7 - 6) \div 2$ ()の中をさきに計算するけど、$\times$とーがあるので、$4 \times 7 = 28$の計算をさきにします。 次に、$28 - 6 = 22$の計算します。 最後に、$22 \div 2$の計算します。	③ $(4 \times 7 - 6) \div 2$ ()の中をさきに計算するけど、$\times$とーがあるので、$4 \times 7 = 28$の計算をさきにします。 次に、$28 - 6 = 22$の計算します。 最後に、$22 \div 2$の計算します。 答は11です。	③ $(4 \times 7 - 6) \div 2$ $(4 \times 7 - 6) \div 2 = (28 - 6) \div 2$ $= 22 \div 2$ $= 11$ これをかきわすれないように！

3年生は、学習課題をつかむことから、4年生は、プリントを使つての前時の復習から、授業を始める。

3年生には、題意をつかませることが大切である。そのためには、問題文の提示とともに、本立てのさし絵を活用し、視覚的に題意をとらえさせるようにしたい。問題を解くにあたっては、線分図から「図かん1冊の厚さの9倍が本立てのはば」という見方ができるようにする。次に、関係図から「本立てのはばから図かん1冊の厚さを求めるには、9でわればよい」という見方ができるようにし、立式へとつなげたい。

4年生では、なぜこのように計算したのか、どのきまりを活用したのか説明する算数的活動を取り入れたい。ただ単に計算するだけでなく、学習の過程を筋道立てて説明する力やわかりやすく伝える力を育てることが大切である。思考過程をことばで表現することは学習内容の一層の理解につながると考える。また、その思考過程を式で表す方法も理解させたい。＝は、答えを出すのではなく、前と後ろの式が等しいことを表しているということをきちんと理解させ、正しく式を繋げていけるよう指導したい。

イ パターンBの授業

次に、パターンBの授業の展開を考えてみた。3年生は「時こくと時間」、4年生は「面積」の単元である。学習活動をずらすのではなく、両学年ともにスライドで提示しての課題把握から始める。また、4年生では、普遍単位 1 cm^2 の定義を理解する活動においてもスライドを使用する。両学年が同時進行の授業となるので、児童の様子をよく観察しながら、わたりを効果的に行うことが重要となる。

第3・4学年（複式）算数科学習指導案

1 単元名

3 年 「時こくと時間」

4 年 「面積」

2 単元の目標

3 年	4 年
必要な時こくや時間を計算によって求めたり、秒の単位を用いて測定したりすることができる。	面積の概念を理解し、面積の単位 cm^2 、 m^2 、 km^2 、 a 、 ha を知る。また、長方形や正方形の面積の公式を知り、それらを求めることができる。

3 単元の評価基準

3 年	4 年
ア【関心・意欲・態度】 時こくや時間の計算のよさや秒に関心を持ち、進んで身の回りの時間の計算をしようとする。 イ【数学的な考え方】 時間のしくみをもとに、時こくや時間の計算のしかたを考えることができる。 ウ【技能】 必要な時こくや時間を計算によって求めたり、秒の単位を用いて測定したりすることができる。 エ【知識・理解】 時こくや時間の求め方や秒について理解できる。	ア【関心・意欲・態度】 長方形や正方形の面積を表すことに関心を持ち、長方形や正方形の求積公式を利用して、身の回りにあるものの面積を求めようとする。 イ【数学的な考え方】 長方形や正方形の求積のしかたを考えることができるとともに、くふうして面積を求めることができる。 ウ【技能】 求積公式を用いて、色々な長方形や正方形の面積を適切な単位を選んで求めることができる。 エ【知識・理解】 面積の概念を知り、面積の単位cm^2、m^2、km^2、a、haがわかる。また、長方形や正方形の求積公式を理解する。

4 指導計画

3 年（全4時間）	評価内容	4 年（全9時間）	評価内容
①時こくと時間（1時間）	ア・イ・ウ	①花壇の広さ比べ（1時間）	ウ・エ
②時間の求め方（1時間）〈本時〉	イ・ウ	②広さの単位（1時間）〈本時〉	イ・ウ
③時こくの求め方（1時間）	イ・ウ	③面積の公式（1時間）	ア・イ
④分と秒の関係（1時間）	エ	④平方メートル（3時間）	ウ
		⑤面積の求め方のくふう（1時間）	
		⑥大きな面積（2時間）	イ・エ

5 本時の学習

(1) 目 標

3 年	4 年
時こくと時間に関心を持ち、2つの時こくを知って、その間の時間を求めることができる。	長方形と正方形の広さを数値化して表すための単位「 cm^2 」を知り、1 cm^2 のいくつ分で広さを表したり、決められた広さの図形を作図することができる。

(2) 展 開

3 年		わたり	4 年	
指導・支援	主な学習活動		主な学習活動	指導・支援
●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター プリント	①本時の学習課題をつかみ、見通しを持つ。 ワークシート	10	①本時の学習課題をつかみ、見通しを持つ。	●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター プリント
●時計の模型や時こくを目盛った直線を活用するよう助言する。 ■（評価イ）	②課題解決をする。	15	②普遍単位 1 cm^2 の定義を知る。	●普遍単位 1 cm^2 を丁寧に指導する。 パソコン・モニター
●根拠をはっきりさせて発表できるように助言する。 ■（評価イ）	③自分が考えた方法を発表する。	25	③ノートに、 1 cm^2 の単位の意味をまとめる	●単位のかけ方等も丁寧にできるように指導する。
●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター	④次の学習課題をつかみ、見通しを持つ。 ワークシート	30	④課題解決をする。	● 1 cm^2 をという単位を使って課題を解決できるように助言する。
●課題解決の後、リーダーを中心に答え合わせをさせる。 パソコン・モニター	⑤課題解決をする。	35	⑤自分の考えを発表する。	●根拠をはっきりさせて発表できるように助言する。 ■（評価イ）
●個人差に配慮しながら一人ひとりが自信を高められるように配慮する。 ■（評価ウ）	⑥練習問題をし、理解を深める。 プリント	42	⑥練習問題をし、理解を深める。 プリント	●個人差に配慮しながら一人ひとりが自信を高められるように配慮する。 ■（評価ウ）
●次時への学習意欲を高める。	⑦本時のまとめをし、次時の課題をつかむ。	45	⑦本時のまとめをし、次時の課題をつかむ。	●次時への学習意欲を高める。

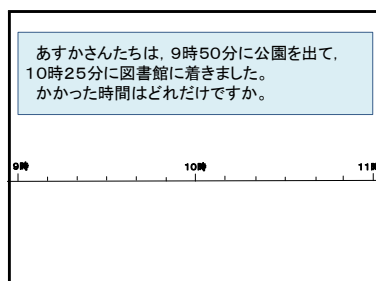
(3) 評価及び指導の例

		3 年	4 年
イ	「十分に満足できる」と判断される状況	時間の求め方を説明することができる。	広さの比べ方をくふうして考えることができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	10時、正午で区切った線分図をかかせ、思考の手助けとする。	ます目の数がいくつ分かに着目させるように助言する。
ウ	「十分に満足できる」と判断される状況	正しい時間を求めることができる。	1 cm^2 を単位にして、面積を求めることができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	2つの時こくの間の時間を、模型の時計や数直線を使って考えさせる。	1 cm^2 の正方形をノートにかかせることにより、面積の単位 1 cm^2 を理解させる。

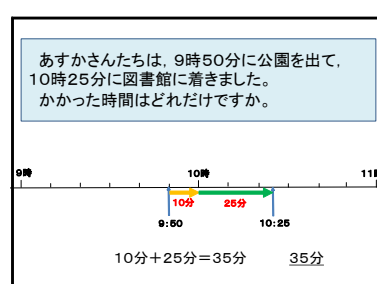
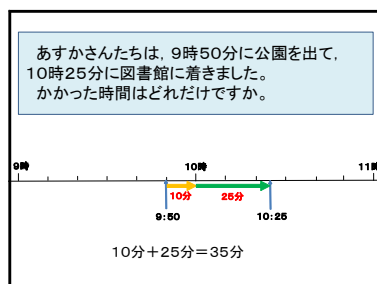
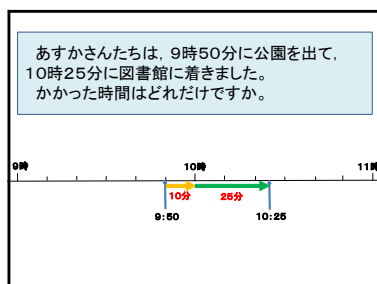
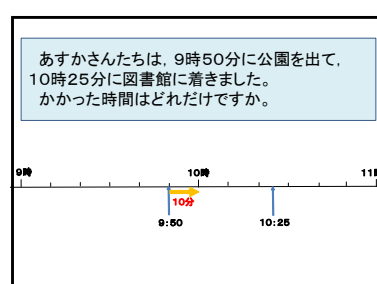
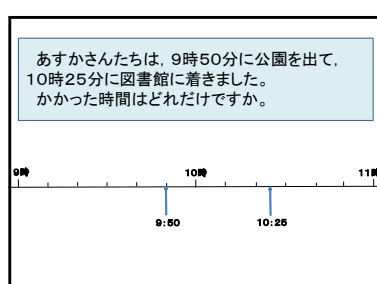
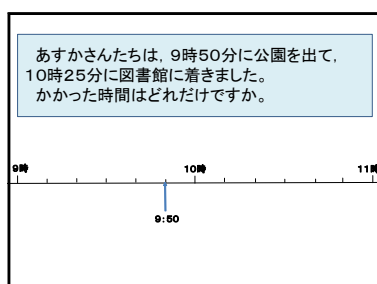
3 年「時こくと時間」で使用するスライド

下のスライドは、課題を提示するものである。児童の思考の手助けとなるように時こくを目盛った直線を提示する。これは、プリントとしても児童に配布するようにする。

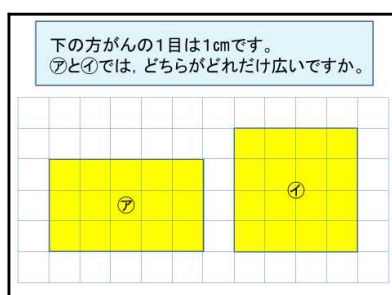
あすかさんたちは、9時50分に公園を出て、10時25分に図書館に着きました。かかった時間はどれだけのですか。



下のスライドは、時こくを目盛った直線を使って、かかった時間を順序立てて理解できるように作成してある。10時を境に10分と25分という時間に分けてあり、それらを合わせれば求められることに気付かせていく。

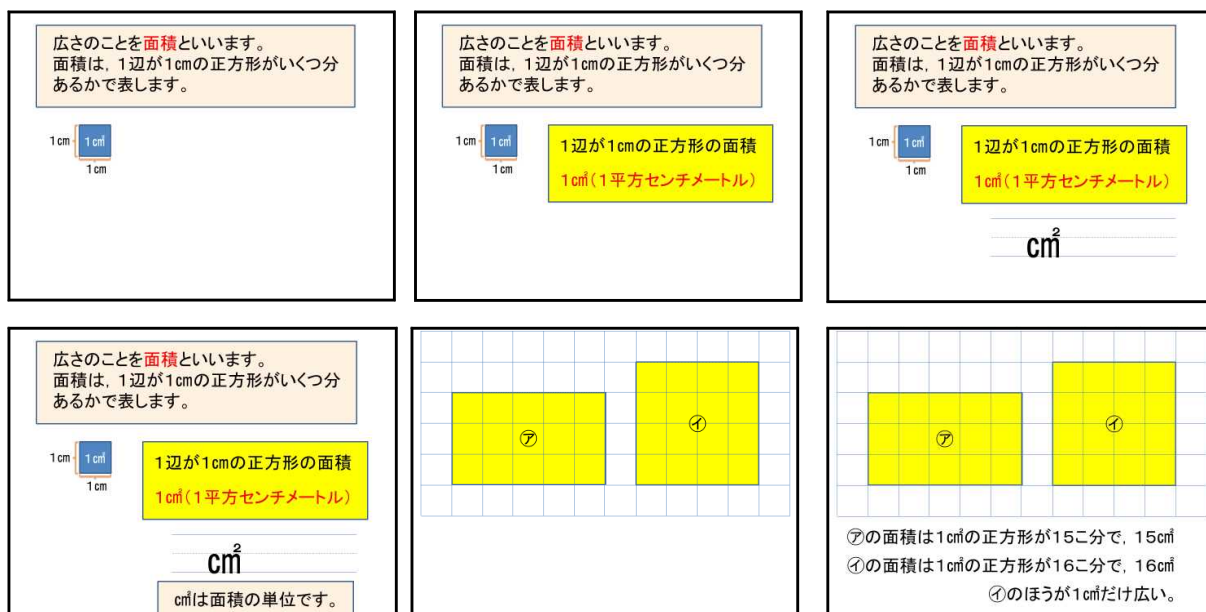


4 年「面積」で使用するスライド



このスライドは、問題を提示するものである。前時の任意単位による比較を想起させながら、図のちがいについて話し合わせる。

これは、プリントとしても児童に配布するようにする。



3年生では、まず、長針が12をこえる1時間以内の時間の計算を扱う。時計の模型をもとに、5分とびで目盛りを数えれば、時間は35分と求めることができる。時計がなくてもさらにわかりやすく時間の計算ができるようにするために、時こくを目盛った直線を活用することが有効となる。これを用いて、10時を境に10分と25分という時間に分けられ、それらを合わせれば求められることに気づかせていく。

次に、午前から午後にわたる計算を扱い、長い時間について考えさせる。ここでも、時こくを目盛った直線を活用する。区切りの良い正午を境にすると、3時間と5時間30分に分けられることに着目し、それらを合わせて求められるようにする。

4年生では、普遍単位1cm²を丁寧に指導したい。そのために、まず、1目もりが1cmの正方形の方眼紙に図形を重ねて見ることで、1cm²の広さを普遍単位として、そのいくつ分で広さを表せることをとらえさせたい。また、面積の定義をノートにまとめさせる作業にも時間をさきたい。

そして、時事に学習する公式の布石として、敷き詰められた1cm²の正方形を数えて面積を求める問題に取り組む中で、縦に並んだ数と横に並んで数をかけ合わせると「いくつ分」がすぐにわかることに気づかせたい。

ウ パターンCの授業

最後にパターンCの授業を考えてみた。単元は、3年生が「かくれた数はいくつ(2)」、4年生が「直方体と立方体」である。4年生は、課題追求に時間がかかるので、このパターンを採用した。展開図をかく作業は個人で進める。スライドで提示された展開図から立方体を組み立てることができるかを考える作業は、リーダーが中心となってパソコンを操作し、児童だけで進めることになる。3年生は、線分図をかく作業を通して、数量関係を捉えるようにさせたい。

第3・4学年（複式）算数科学習指導案

1 単元名

3 年 「かくれた数はいくつ（2）」

4 年 「直方体と立方体」

2 単元の目標

3 年	4 年
順思考と逆思考を組み合わせた3要素段階の問題を解くことができる。	観察を通して直方体や立方体を理解し、見取図や展開図をかくことができる。また、面や辺の垂直・平行の関係がわかる。

3 単元の評価基準

3 年	4 年
ア【関心・意欲・態度】 絵や図や線分図を使って意欲的に問題解決にあたろうとする。 イ【数学的な考え方】 順思考と逆思考を組み合わせた3要素2段階の問題の解決の方法が説明できる。 ウ【技能】 順思考と逆思考を組み合わせた3要素2段階の問題を解くことができる。 エ【知識・理解】 線分図による数量の関係の表し方がわかる。	ア【関心・意欲・態度】 直方体や立方体に関心をもち、進んでそれらの性質を調べようとしたり、それらの形を身の回りから探そうとしたりしている。 イ【数学的な考え方】 直方体や立方体を点、線、面の構成要素から分析的にとらえて性質を考えることができる。 ウ【技能】 直方体や立方体の構成要素やそれらの位置関係をとらえ、見取図や展開図をかくことができる。 エ【知識・理解】 直方体や立方体の定義や性質がわかる。また、平面上や空間の位置関係および位置の表し方がわかる。

4 指導計画

3 年（全2時間）	評価内容	4 年（全5時間）	評価内容
①はじめの数を求める （1時間）〈本時〉	ア・イ ウ・	①直方体と立方体 （1時間）	ア・イ エ
②残った数を求める （1時間）	イ・ウ エ	②直方体と立方体の見取図 （1時間）	イ・ウ
		③直方体と立方体の展開図 （1時間）	イ・エ
		④立方体のいろいろな展開図 （2時間）〈本時1／2〉	ア・イ ウ

5 本時の学習

（1）目 標

3 年	4 年
逆数の考え方をういて、残りのかず（c）に変わっていった数（a，b）の和を加えることで全体量を導き出す問題を解くことができる。	立方体の展開図をかくことを通して、根拠をもって展開図のかき方を考えたり、かき方のきまりを見出したりする。

(2) 展 開

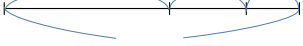
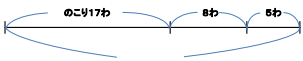
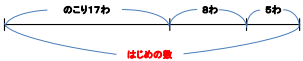
3 年		わたり		4 年	
指導・支援	主な学習活動			主な学習活動	指導・支援
●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター	①本時の学習課題をつかみ、見通しを持つ。	5	5	①本時の学習課題をつかみ、見通しを持つ。	●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター
●さしを使って正確に図をかけるように助言する。 ■（評価ウ）	②ノートに、線分図をまとめる。 パソコン モニター	15		②ノートに色々な立方体の展開図をかく。	●正方形方眼紙を6枚利用して、色々な展開図を考えるよう助言する ■（評価ア）
●線分図をもとに課題解決できるよう助言する。 ■（評価イ）	③課題解決をする。	22		③パソコンに表示される展開図を見て、立方体が作れるかどうか考える。	●リーダーを中心に学習を進めさせる。 ■（評価イ） パソコン・モニター
●線分図からどのように式を導き出したのかを説明させる。	④自分の考えを発表する。	30		④11種類の展開図をノートにまとめ、気づいたことをまとめる。	●正方形が4枚並ぶ展開図と、そうでない展開図があることに気づかせる。 ■（評価ウ） パソコン・モニター
●個人差に配慮しながら一人一人が自信が高められるように配慮する ■（評価ア）	⑤練習問題をし、理解を深める。 プリント パソコン モニター	42		⑤本時のまとめをし、次時の課題をつかむ。	●次時への学習意欲を高める。
●次時への学習意欲を高める。	⑥本時のまとめをし、次時の課題をつかむ。	45			

(3) 評価及び指導の例

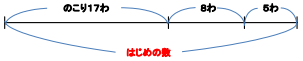
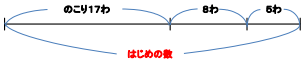
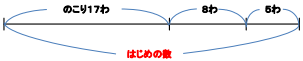
		3 年	4 年
イ	「十分に満足できる」と判断される状況	問題文とさし絵から、問題の意味をとらえ、それらの関係を表す線分図の意味を理解することができる。	いろいろな展開図を見て、立方体を組み立てることができるかどうかを考えることができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	さし絵を示すことで、具体的な場面と線分図をつなげやすくする。	パソコンを利用して、立方体の展開図になっているかどうかを考えさせる。
ウ	「十分に満足できる」と判断される状況	線分図を正しくかいて問題を解くことができる。	立方体の展開図を色々とかくことができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	パソコンを利用して線分図のかき方を理解させる。	正方形の方眼紙を並べ替える作業を通していろいろな展開図をかかせる。

3 年「かくれた数はいくつ（２）」で使用するスライド

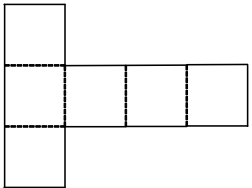
下のスライドは、課題を提示するものである。課題を、図に表すことを考えさせた後、正しい線分図のかき方を提示し、自分が考えた図と比較させたい。ノートに正しく線分図がかけられるように指導する。

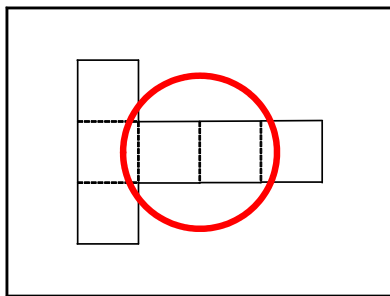
広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。	広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。 	広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。 
広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。 	広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。 	

線分図から、自分の力で式を立て、課題解決にあたらせる。その後、どのように考えて式を導き出したのかを説明させるようにする。

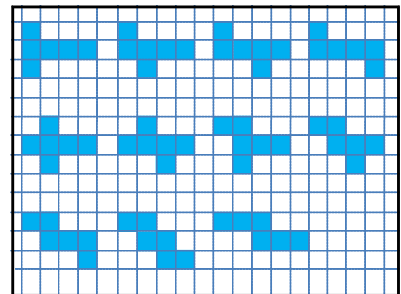
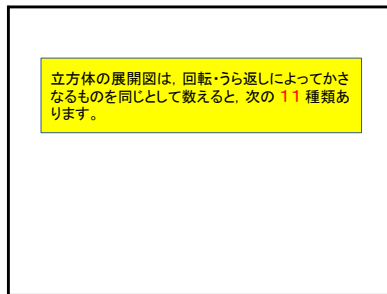
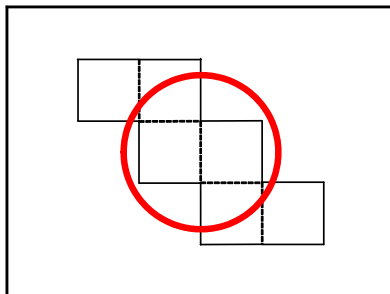
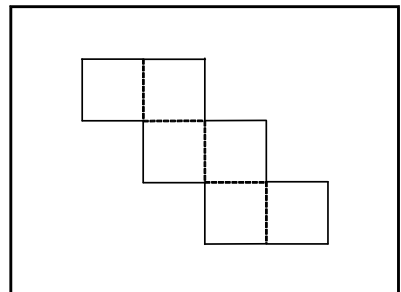
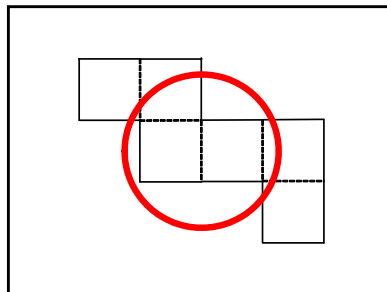
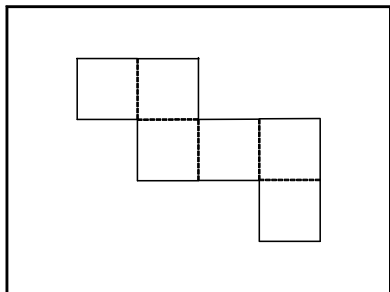
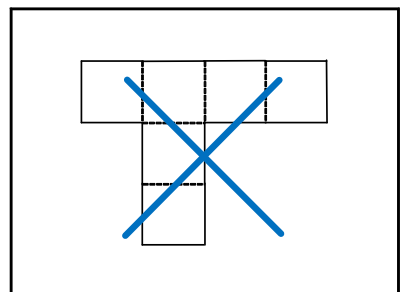
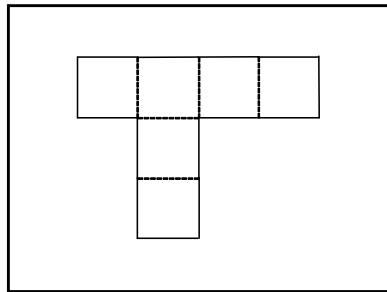
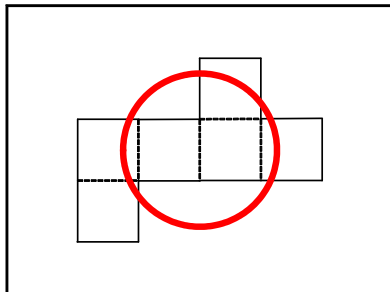
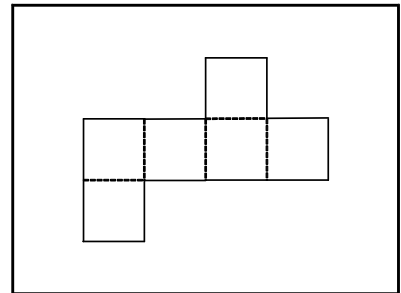
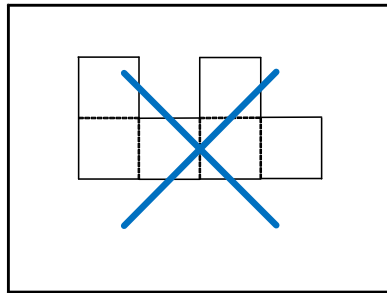
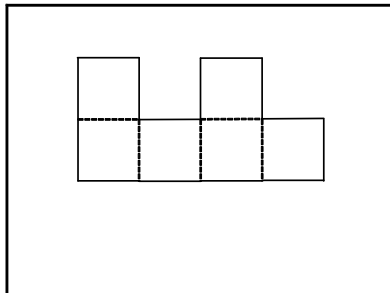
広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。  とんでいった数は？	広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。  とんでいった数は？ $5 + 8 = 13$ はじめの数は？	広場にはとがいました。 そのうち、5わとんでいきました。また、8わとんでいったので、のこりは17わになりました。 はじめ、はとは何わいましたか。  とんでいった数は？ $5 + 8 = 13$ はじめの数は？ $13 + 17 = 30$ <u>30わ</u>
--	--	---

4 年「直方体と立方体」で使用するスライド

次に出てくる展開図は、立方体の展開図になっているでしょうか。 ○か×かで答えましょう。		1つのスライドを提示するごとに、リーダーは間を取り、みんなの考えを聞くようにする。
--	---	--



みんなの考えが同じであれば、リーダーはクリックをして正解を示す。違う考えが出た場合には、どうして立方体になるのか、ならないのかについて話し合いを深めさせた後、正解を示すようにさせる。



3年生では、児童が問題把握をするために、各数量がどのような意味をもっているのか、さし絵などを利用して丁寧に検討したい。飛んでいった数を順にたす考え方も認めていくが、図と対応させながら、飛んでいった数をまとめて残りと合わせればよいことに気づかせたい。飛んでいったのになぜ+5、+8とたし算なのかを視点を、式で表されることは、図の中のどの部分のことなのかを結びつけて説明するようにさせたい。

4年生は、導入で、2種類の展開図から立方体ができることを示し、他にも展開図ができないか意欲付けをし、立方体の展開図をつくる活動へと導いていく。授業前半では、自分のノートに展開図をかく活動を進める。授業後半では、パソコンで提示される展開図から立方体ができるかを考える活動を進める。導入以外は、リーダーを中心に自分たちだけで学習を進めることになる。

4 おわりに

複式の算数の授業ではどうしても教師のわたりが生じ、直接指導する時間が限られているため、指導内容を効率よく指導していくことが大切である。しかし、パソコンを有効に活用すれば、間接指導の際にも、児童が主体的に学習に取り組むことができるようになると思う。ただ、すべての場面でパソコンを活用することが効果的であるとは言えない。教師の立場としては、本当に必要だと思われる場面、有効だと思われる場面を選び出し、授業にうまく導入していくことが必要になるであろう。

また、現代社会においてのパソコンの果たす役割の大きさを考えれば、パソコンの活用は決して無視できるものではない。算数科の授業においても、パソコンを有効に利用できる場面に限っては、積極的に導入していくことが重要になると考えられる。

今回紹介できたのは、ほんの数例であるが、2年間の研究で、たくさんの教材を作成することができた。今後さらに実践を増やし、子どもたちが抱える課題を明らかにしながら指導のあり方を研究していきたい。

研究主題

社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ～討論活動を取り入れた授業づくり～

三好教育研究所 研究員 井川秀樹

1 はじめに

社会科の学習指導要領の目標は「国際社会に生きる民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことである。その達成のためには、社会に対する関心を高めて、多面的・多角的に考察し、基礎的教養を培うことが大切である。変化の激しい現在の社会で生きていくためには、社会的事象を単なる知識としてとらえて暗記するだけのものではなく、得た知識を活用して自分の思いや考えをまとめて表現する力が必要になる。つまり生徒に、基礎的な知識、概念や技能を実生活で活用するために、国際化に対応するなど広い視野で社会的事象を読み取りそれを考察することや、考察したことを通して判断すること、学習の過程から生まれた意見を生徒相互で表現し合うことなど、より良く問題解決するための思考力・判断力・表現力を身につけさせることが重要である。

2 主題設定の理由

(1) これまでの実践から

図1は所属校の2年生の社会科に関する意識調査の結果である。社会が嫌い（やや嫌い含む）が5割近になっている。1年生時（5月）の同じ調査では、2割程度であったので、中学校に入学してから社会科嫌いが増えていることになる。そして、その理由の多くが、「暗記することが多い」（資料2）という理由であった。これらの調査結果から私の授業が「暗記」することが中心の知識の獲得を重視した授業展開になっていないか、見直していく必要がある。

図1

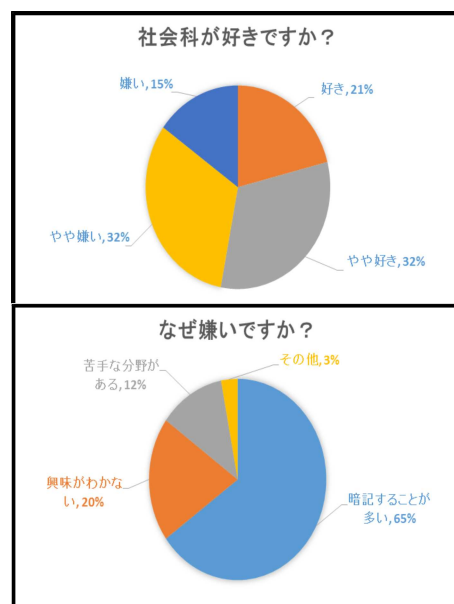


図2

(2) これまでの教科指導を振り返って

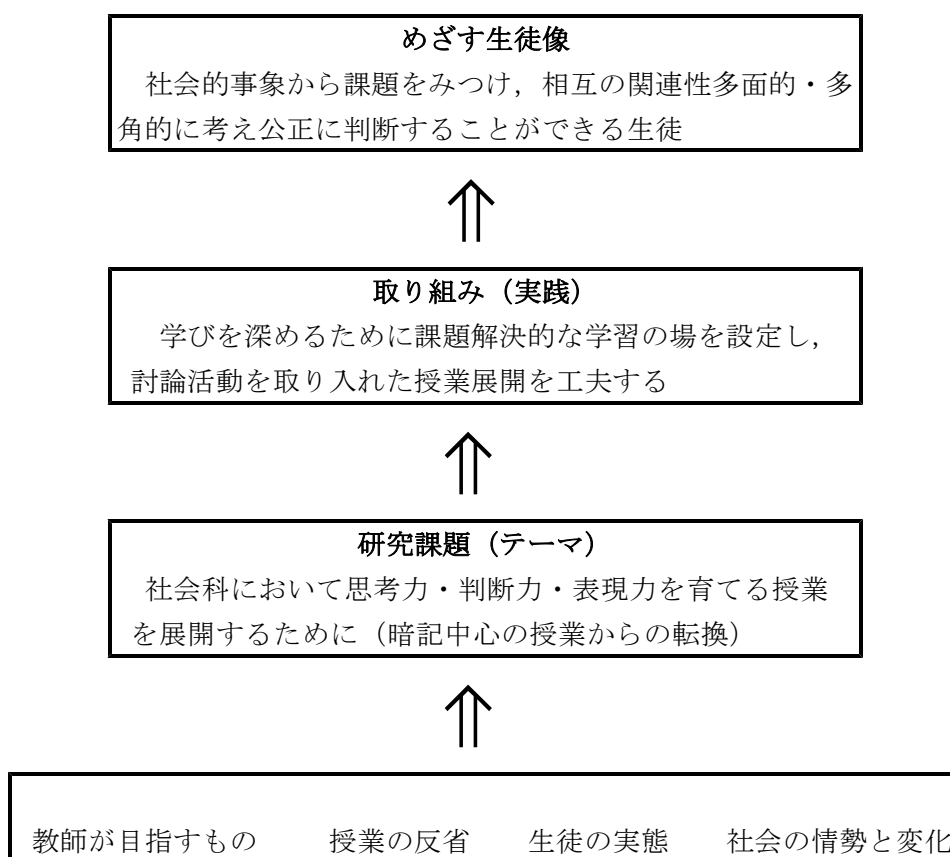
所属校での私の授業実践は、重要事項を板書説明し、教科書から作成したワークシートを活用し知識を定着させることが中心の授業展開がであり、課題解決的な取り組みが少なく個別学習で解答できるものが多かった。資料の活用においても読み取り学習が中心であり、比べたり関連づけたり考えたりすることができていなかった。これまでの授

業では、資料や社会的事象を身近なものとして結びつけて考えたり、学びを深めるための生徒同士の学び合いを生かしたりする場面の設定が不十分であったと考えられる。

今までの授業では、受験には役だったとしても、実際の社会生活に役立つ、「生きる力」の育成までには至っていない。そこで、社会科学習で本当に社会で役立つ力を身につけることができる授業の展開を考えた。

3 研究内容

(1) 研究内容とめざす生徒像について（研究構想図）



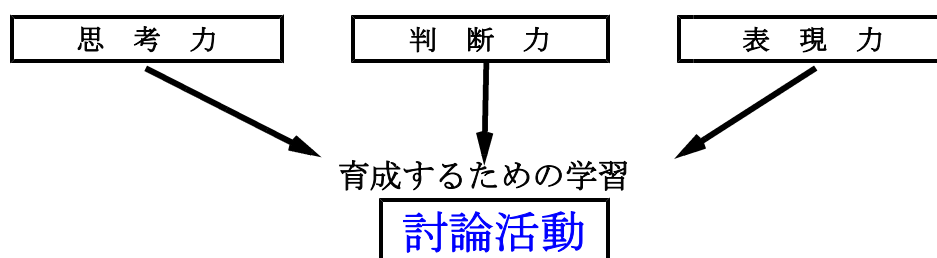
(2) 社会科における思考力・判断力・表現力について

社会科に求められる「思考力・判断力・表現力」とは、社会事象から課題を見いだして社会事象の意味や意義、事象の特色や事象間の関連を多面的・多角的に考察し、公正に判断したことを適切に表現できる力と考える。そして、それらの力は、一つ一つ分離して考えるのではなく関連する能力として、総合的にとらえて育成していかなければならない。

(3) 社会科授業での討論活動の有効性について

社会科は、「公民的資質の基礎を養う」ことを教科の目標としている。社会科

の授業に討論活動を取り入れることは、公民的資質の育成にも有効であると同時に、社会科の学びを深めることにもつながる。学びを深めるとは、学んだことから自分の考えを確立し、他者との関わりを通してその考えを再構築し、物事の本質に迫ることではないかと考える。討論活動を充実させるためには疎外感や孤立感のない民主的な学習集団を形成することが重要となる。生徒の発達段階を踏まえて日常の授業の中で養われる合意形成、相互理解、人権尊重に関わる力とともに、討論活動により多面的・多角的なものの見方に触れ、自己決定の場としても意識し、省察する力が育成され则认为る。



(4) 考えて判断し表現する討論活動

討論活動とは、「ある事柄について対立軸を設定し、意見を出し合い、考えを深めていくこと」である。この活動は、ある社会的事象について自分なりの価値判断をもち、それを互いに表現し、相手に自分の考え方や思いを伝え理解してもらう学習の方法であり、「確かな知識と多面的・多角的な思考力」、「公正な判断力」、「豊かな表現力」を身につけるための有効な学習方法である。

討論には、まず学習内容についての知識と理解が必要である。その上で、他者の考えを自分の考えと比較して聞いたり論理的かどうかを考えたりする思考力と判断力、自分の集団の意見として表明し自分の考えを人に理解させるための表現力を、自主的な思考過程を通して習得することができると考える。つまり、討論活動を単元の学習に効果的に位置付けることによって、思考力・判断力・表現力の育成には効果が高いと考える。そして最後には、生徒がすでに習得している経験や知識を用いて、選別したり修正したりしながら考えを発展させ、物事の本質に迫ることができると考える。

(5) 単元計画の中の討論活動の位置付け

	過 程
①	社会的事象の理解 (出来事や仕組みを学習する)
②	社会的問題(課題)の発見 (どのような問題があるかを見つける)

③	問題（課題）解決のための方法の立案 （問題に対しての自分の考え・方法の確立）
④	〈討論活動〉 問題（課題）を検討する （他の人の意見や考えを参考にしよう）
⑤	討論活動をから意見の修正 （こうすればもっとよくなるのではないか）

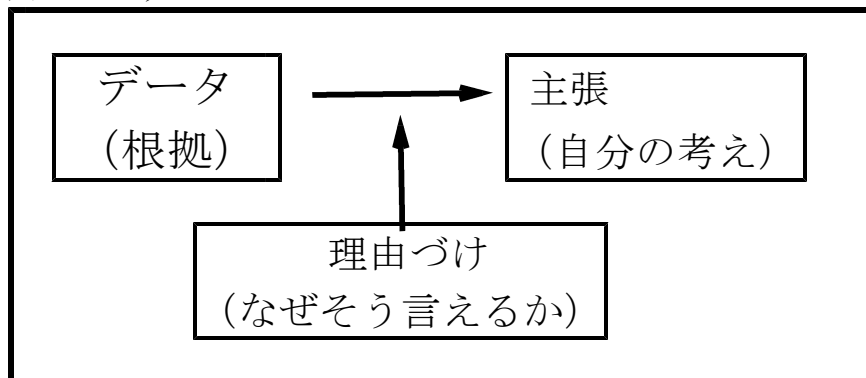
（５）討論活動にトゥールミンモデルを活用（自分の考えを作り上げる方策）

生徒による討論をかみ合わせるためには、意見の作り方と反論の仕方を指導しておく必要がある。そのためにトゥールミンモデルを取り入れるようにした。図１にあるように、意見を結論、データ、理由に分けるようにする。このモデルに合わせることで、意見の構造を視覚的に捉えることができるようになり、討論活動によって検討すべき点を明確にすることができる。結論に妥当性があるかどうかは、証拠となるデータに信憑性があるのか、理由が明確であるかで判断することができる。したがって、意見を検討するときは、データや理由について反論を行わせるように指導する。

反論を行わせる場合は、意見のどの部分が不十分であるのかを明確にさせる。理由がはっきりしていない場合には理由を、データがはっきりしていない場合にはデータに反論することを確認して反論を考えさせ、トゥールミンモデルに直接書き込ませるようにする。なぜなら、何が論点になっているのかをはっきりさせることができ、かみ合った討論を行わせることができるからである。また、考えをつくりあげて価値判断する流れを図式化しているため、生徒がどこでつまづいているのかを視覚的に把握することができ、個々に応じた適切な支援もできる。

以上のことから、トゥールミンモデルを取り入れた討論活動は、生徒の思考を深めさせ、根拠を明確にして判断を行わせることができるものであると考える。

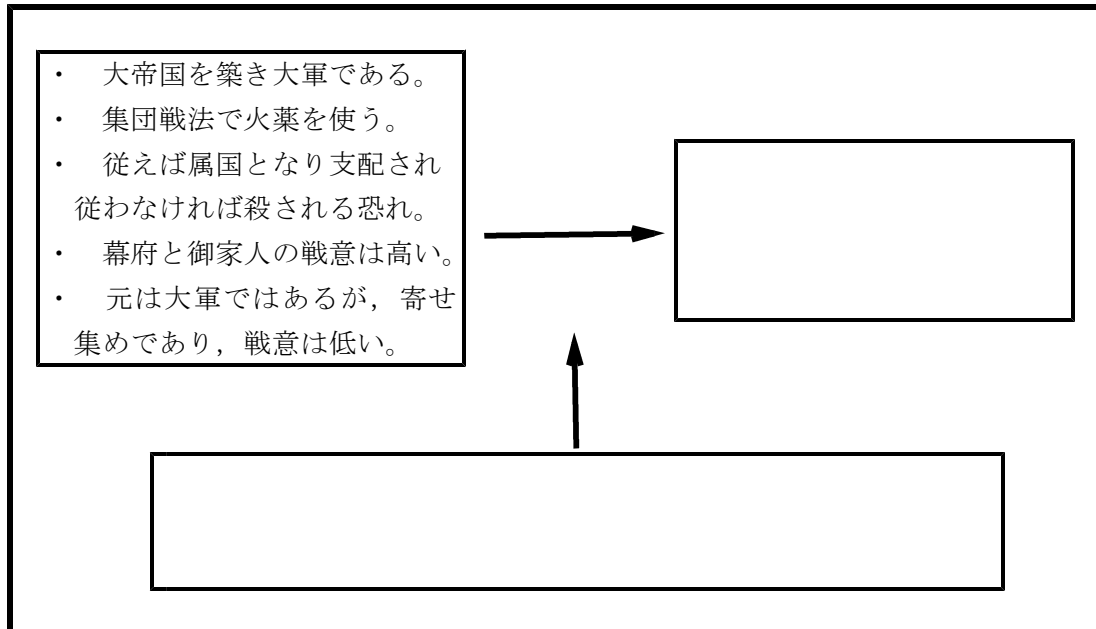
図３ トゥールミンモデル



(6) トゥールミンモデルを活用したワークシート

論題：元の使者が日本にやってきた。あなたが執権ならどう対応するか。

意思決定 1



★意思決定 2 では、データ根拠に他の人の意見を入れる。

4 実践（授業研究）

○ 1 学年での研究授業

1 単元名 「元軍の襲来」 ～元寇と鎌倉幕府の滅亡～

2 単元について

(1) 教材感

この単元では、武家としての初めての政権である鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府、東アジアの国際関係、応仁の乱後の社会的な変動などを通して、武家政治の特色を考えさせ、武士が台頭して武家政権が成立し、その支配が次第に全国に広まるとともに、東アジア世界と密接な関わりが見られたことを理解させることをねらいとしている。

源頼朝は平氏の政治のやり方を教訓として、あくまで武士として政治を行おうとした。朝廷とは距離を置き御家人との主従関係で結ばれた封建政治を行おうとした。この単元では頼朝による武家政治が東国に生まれ、そこから全国に権力が拡大して

いく様子を、日本史上初めての武家政権である幕府と朝廷の関係に注目しながら理解していく。

今回は既習している「元の成立」も含めて「元寇」までを1つの単元に再構成し二度にわたる元の襲来と日本の(幕府)の対応について理解させたいと考えている。この武家政権が始まった鎌倉時代が、他の時代に比べてどのような違いや特徴をもっているのかについても多面的・多角的に考察し、最後(本時)に「元の使者が日本にやってきた。あなたが執権ならどう対応したか」というテーマで討論や意思決定過程を取り入れた授業を行い、思考力・判断力・表現力を育てたいと考える。また、根拠に基づいて判断したり、自分の考えを練り直させ、より高まった考えをもたせることができるように、「トゥールミンモデル」を使い学習を進めたいと考える。

(2) 生徒感

対象学級の生徒達は、一つの歴史的事象一人の人物については掘り下げて理解きても、その背景にあるものを理解できている生徒は少ない。また、既知の学習内容に基づいた答えや自分なりの簡単な意見を友達に伝えることはできるが、知識に裏付けされた意見や、資料などの根拠に基づいた意見を構成する力は十分とは言えない。

4 単元の目標

- (1) 武士が台頭し武家政権が成立したことや鎌倉時代の武士や民衆の動き、また、元の襲来など東アジアとのつながりについての関心を高め、それを意欲的に追求し、とらえさせる。
- (2) 武士が台頭し武家政権が成立して、武士の支配が全国に広まり、武家社会が発展していったという時代の流れや元の襲来が日本の政治や社会に与えた影響について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に実現させる。
- (3) 武士が台頭し武家政権が成立したことや鎌倉時代の武士や民衆の動き、鎌倉文化に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取った図表などにまとめたりさせる。
- (4) 武士が台頭し武家政権が成立して、武士の支配が次第に全国に広まり武家政権が発展していったことを理解させ、その知識を習得する。

5 評価基準

①社会的事象への 関心・意欲・態度	②社会的な 思考・判断・表現	③資料活用の 技能・表現	④社会的事象につい ての知識・理解
○武士が台頭し武家政権が成立したことや鎌倉時代の武	○武士が台頭し武家政権が成立して、武士の支配が次第	○武士が台頭し武家政権が成立したとと、鎌倉時代の	○武士が台頭し武家政権が成立して、武士の支配が全国

士や民衆の動きに対する関心を高め意欲的に学習することができている ○元寇の与えた影響について、その考察結果を基に、よりよい社会について自分なりの考えをもとうとしている。	に全国に広まり、武家社会が発展していたという時代の流れを、幕府と朝廷との関係、土地制度の変化などから多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できている。	武士や民衆の動き鎌倉文化に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取りまとめることができる。	に広がり、武家政治が確立されていたことを理解しその知識を身につける。 ○時代背景に、元寇の経緯やその影響を当時の東アジアの情勢、国内状況から理解できている。
--	--	--	--

6 単元の指導計画（全6時間 本時6／6）

過程	主な学習活動	教師の働きかけ	評 価	時数
学 習 問 題 を つ か む	○武士が次第に勢力を広げたことを、関東や瀬戸内などで起こった戦乱の様子から理解する。	○武士団では、天皇や貴族の子孫が武士の棟梁となって、家来と主従関係を結んだことを、資料から読み取らせる	●平氏や源氏が武士の中心だった理由について、資料から適切な情報を読み取ることができる。【③】	第 1 時
	〈学習課題〉：武士が台頭していった理由を考え、説明しよう。			
調 べ	○武家政権の特色を、幕府や朝廷の関係から理解する。	○鎌倉の地形的要因に着目させて、幕府が置かれた理由を考えさせる。	●資料を基に、頼朝が鎌倉に幕府を開いた理由や封建制度の仕組みについて理解できている。 【②】	第 2 時
	○鎌倉時代の武士の生活の様子を様々な資料から理解する。	○武士の生活が、貴族とは違い武芸が中心の質素な生活であったことを資料「武士の館」から理解させる。	●武士が常に戦に備えていたことを資料より読み取りまとめることができる。【③】	第 3 時

考 え ・ ま と め る	○北条氏の政治のやり方と承久の乱による幕府や朝廷への影響について理解する	○承久の乱が起こった時代背景を考えさせ、資料「北条政子の訴え」から、当時の時代背景を理解させる。	●承久の乱による朝廷と幕府への影響を説明できる。 【③】	第 4 時
	○鎌倉時代の建築物・彫刻・文学作品などを調べて鎌倉文化の特色を理解する ○仏教の特色を理解して広まった理由を考える。	○鎌倉時代の文化が、武士の台頭の影響を受けて力強く、写実的な文化であることを理解させる。また、鎌倉仏教が急速に広まった原因を理解させる。	●鎌倉仏教と文化の特徴が武士との関わりで理解できている。【④】	第 5 時
考 え ・ ま と め る	○ユーラシア大陸での動き、及び二度にわたる元の襲来と日本の対応を理解する ○元寇の影響を考える（日本と元両方の立場で）	○二度の元寇で、元軍を退けた理由が暴風雨以外にもあることを映像や資料から理解させる。 ○二度の襲来により幕府と元の力が衰えていったことを理解させる。	●資料を基に、暴風雨以外で日本が元を退けた理由を読み取っている。 【③】 ○元寇が幕府政治に及ぼした影響及び幕府滅亡の要因を、主従関係を核にして理解できている【④】	第 6 時
	論題 1 元の使者が日本にやってきた。あなたが執権ならどう対応するか。			第 7 時
	○幕府が行った元に対する対応について議論し、自分の意思決定を1を行う。 ○二つの対立軸を決定して、討論を行い、意思決定2を行う。	○自分が幕府の執権の立場で、既習内容や資料、友達の意見などを基に、幕府の対応が正しかったかについて考えさせ、最終的な意思決定をさせる。	●討論に参加し、討論の内容を参考に自分の最終意見（意思決定2）を適切に表現している。	

7 本時の目標

論題「元の使者が日本にやってきた。あなたが執権ならどう対応するか。」について既習の知識や資料等から考え、小集団（グループ）での話し合いを経て最終的な自分の意見を適切に表現することができる。

8 展開（全7時間 本時7／7）

学 習 活 動	教師の働きかけと評価												
1 元寇の流れと影響について復習する。	○ 資料等を掲示し、幕府の対応によって、良かった点と問題点を確認させる。（元と戦った） ・ 予想される意見 <table border="1"> <thead> <tr> <th>良かった点</th><th>問題点</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①元に侵略されなかった。</td><td>①多くの御家人が死んだ。</td></tr> <tr> <td>②元の力が弱くなった。</td><td>②多くの費用を使った。</td></tr> <tr> <td>③武士の力を示せた。</td><td>③御家人の不満が増えた。</td></tr> <tr> <td>④他の支配されている国に抵抗する勇気を与えた。</td><td>④幕府が弱体化した。</td></tr> <tr> <td></td><td>⑤3度目の危険がある</td></tr> </tbody> </table>	良かった点	問題点	①元に侵略されなかった。	①多くの御家人が死んだ。	②元の力が弱くなった。	②多くの費用を使った。	③武士の力を示せた。	③御家人の不満が増えた。	④他の支配されている国に抵抗する勇気を与えた。	④幕府が弱体化した。		⑤3度目の危険がある
良かった点	問題点												
①元に侵略されなかった。	①多くの御家人が死んだ。												
②元の力が弱くなった。	②多くの費用を使った。												
③武士の力を示せた。	③御家人の不満が増えた。												
④他の支配されている国に抵抗する勇気を与えた。	④幕府が弱体化した。												
	⑤3度目の危険がある												
2 本時の学習内容を確認する。	○ 討論から最終的な価値判断を決定することを伝える												
3 論題についてどう対応するか意思決定をする。（意思決定1）	○ ツールミンモデルを使い、個人で考えさせる。												
3 各班話し合う。	〈同じ意見の班を作る〉 ○ ワークシートの記入した自分の考えに基づく決定を班で発表させ、話し合いにより班の考えをまとめさせる。【評価①】												
4 班の考えとその理由を発表する。	○ ツールミンモデルを使い、考えを発表し、なぜそうしたかを発表させる。【評価③】												
5 意思決定2を行う。	○ 質問がある場合はその都度質問させる。 ○ 最終的な自分の意思決定を多くの班の意見や考えを参考にして、班を離れた立場で行う。												
6 本時のまとめ	○ ワークシートを利用。												

9 本時の評価

単元の	元の襲来が日本の政治や社会に与えた影響居ついて、多面的
-----	-----------------------------

評価基準	・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している (社会的な思考・判断・表現)		
本時の 評価基準	論題「元の使者が日本にやってきた。あなたが執権ならどう対応するか。」について既習の知識や資料等を生かして考え，グループ・全体への話し合いを経て最終的な自分の意見を適切に表現することができる。(社会的な思考・判断・表現)		
判定基準 (判定のめやす)	A「満足できる」	B「おおむね満足できる」	C「努力を要する」
	元の使者への対応について，既習の知識や資料などの根拠を基に意思決定し，記述している。	元の使者への対応について，自分なりの記述ができている。	Bに達していない生徒
→ B・C と判断した生徒への支援策		→根拠となる資料を用いて記述することを確認する。	→対立軸をを明確にして考えさせる。
評価方法	ワークシートの記述内容・発表の内容		

資料（使ったワークシート）

- (1) 教科書49P図3「モンゴル帝国委の広がり」をみて分かることを箇条書きで書きましょう

- (2) 教科書資料「蒙古襲来絵詞」を見て，気づいたことを箇条書きで書きましょう。

- (3) 教科書資料「元軍の進路」を見て，思ったことを箇条書きで書きましょう。

- (4) 幕府は元と戦うことにしたのはどのような理由からと思いますか？

--

(5) 幕府が元と戦って良かったと思うことと、問題点を考えて書きましょう。

--

(6) 班員の意見で参考になったことを記入しよう。

--

(7) 評価表（班の人の考えと理由づけを評価してみよう。）

A とても良くできていた B 良かった C もう少し

1 班 名前	理由づけと主張 が整合している。	データや根拠に基づ いた主張である。	これまでの学習が主 張に生かされている。
井川			

(8) 班での話し合いで自分の意見を変えたり，修正した点を書きましょう。なければ，取り入れられた自分の考えを書きましょう。

--

(9) 各班の主張（発表）を聞いて，自分の考えで変更したところや修正したところを書きましょう。なければ，聞いての感想を書きましょう。

--

5 研究の成果

授業後の生徒の感想

- ・考えることは楽しいが、考えを発表するのは難しかった。
- ・自分が考えたら、その時代のことが分かってきた。
- ・他の人の意見を聞いたら、いろんな考え方があると思った。
- ・相手に伝え、理解させることの難しさが分かった。
- ・一つの判断で歴史が大きく動くのが面白かった。
- ・考えて自分の意見をまとめられるようになってきた。
- ・友達が自分の意見を分かってくれてうれしかった。
- ・歴史に少し興味がわいてきた。
- ・まわりの意見も聞いたら、自分の意見も深まるといった。

- (1) 考えて、判断し表現することの難しさの中に、少しずつその意義や楽しさを見つけている生徒が増えてきた。また、授業後のワークシートからグループ討議や全体討論から他の意見を聞いて自分の意見を修正したり再構築している生徒が多くなってきていた。これは、生徒に多面的な思考方法が身につけてきたからだと思われる。
- (2) ワークシートを理路整然と書ける生徒が増えていったことと、発表ができる生徒が増えたことは、思考力・判断力・表現力が少しずつ定着してきたからであると考えられる。また、発表までには至っていないが、全員がワークシートを書けていたことから、知識・理解や興味関心は確実に上がってきているのではないかと感じた。
- (3) 単元構成として、討論活動の位置付けを明確にすることで、生徒は段階を追って、様々な資料を読み取り、社会的事象を理解し、学習に無理なく取り組むことができていた。
- (4) ツールミンモデルを討論活動に取り入れたことにより、意見のつくり方や反論の仕方をわかりやすくし、かみ合った意見を出し合わせることができた。それにより、自分なりの考えをもたせることができて、思考力・判断力・表現力を高めることができた。従って、討論学習にツールミンモデルを取り入れたことは効果的であったと考える。また、書けていない生徒への支援や評価もしやすく、この点でも有効であったと感じる。

5 研究の課題

授業後の感想

- ・書くことが多くて難しかった。
- ・考えられても、うまく表現できない。
- ・暗記していないと、まとめができない。

- ・発表することが役に立つとは思わない。
- ・できる人と同じように上手に言えないから、恥ずかしくて発表できない。
- ・発表はしたくない。

- (1) 表現すること自体に意義を感じることができていない生徒も少数であるがいた。
このような生徒に対しては、時間をかけて、常の授業で発表場面を意図的に増やし、表現することへの抵抗を少しずつ軽減していかなければならないと感じた。また、他の教科との連携や朝夕の学活の時間などでもそう言う場面を設定していくなどの工夫も必要であると思った。
- (2) 討論活動中に、生徒の意見が出なくなった時の支援策に課題が残った。教師の反省として、生徒個々の意見を事前に把握し、指名するときの参考にしたらもっとスムーズに討論が進んだと反省する。また、意見を整理し何が争点なのかを知らせるために板書配置の工夫が必要であったと感じる。
- (3) 討論活動を取り入れた授業を展開してきたが、反論など一つ一つの技能を高める指導については、十分でなかったと思う。討論技能の系統性を踏まえた年間指導計画を作成し展開していく必要があると感じた。
- (4) 生徒が十分に思考・判断するためには多くの時間がかかり、時間が不足した。また、ワークシートについては時間短縮のため家庭学習にしたこともあったが、能力に個人差がありうまく機能しなかった。支援のいる生徒への働きかけと個別指導に課題を残した。

今回明らかになった課題の解決を目指し、今後も思考力・判断力・表現力を育てるために討論の授業の研究・実践をさらに進め、たのしく知ることのできる社会科授業を構築していきたい。

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年 度 (平成)	内 容
30	元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして 一学校・家庭・地域が一体となって一 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」 一ふるさと意識を高めるために一 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成 一ボランティア活動を通して一 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 一同単元類似内容の指導の試み一 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ 一児童・生徒の理解と援助のために一 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	2	ふるさとの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道徳教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画 一平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試み一 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して 一コミュニケーション能力の育成のために一 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	3	主体的な生活を促す幼稚園教育 一人とのかかわりをとおして一 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動 一たて割り班の活動を通して一 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 一進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指して一 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか 一学校行事などの活動を通して一 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動 一学習意欲を高める理科の指導一 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 一個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通して一 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究 一性教育の実践を通して一 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して 一体験的活動を通して一 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導 一行書を活用した筆写活動の日常化をめざして一 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子

集	年 度 (平成)	内 容
34	5	健康でたくましい子どもの育成をめざして ー主体的に取り組む活動ー 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 ー一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習ー 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成 ーボランティア活動をととしてー 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代 奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめるー私案 ーピース・メッセージの実践を通してー 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	6	地域に開かれた学校づくり ーすこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事ー 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み ー教科、特別活動の実践を通してー 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 ー家庭科ー 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	7	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考えるー 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして ー「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組みー 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 ー体験学習・ボランティア活動を通してー 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして ー自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援ー 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指してー中学1年生への意識調査と実践例ー 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 ー施設訪問を通してー 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 ー「何について」「どのように」「どこまで」指導するかー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代

集	年 度 (平成)	内 容
38	9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境をどのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切にし、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して ー積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成ー 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適応問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 ーある不登校児とのかかわりを通してー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために ー地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成ー 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は？ ー三好郡内小中学生意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	11	魅力ある幼稚園教育の創造（三好町三園の取り組み） ー生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成ー 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 ー名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通してー 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 ー「選択の時間」を生かした取り組みの中でー 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子
41	12	「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ 自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 ー地域の特性を生かした取り組みの中でー 池田第一中学校 教諭 立花 久 三好郡における情報教育の現状とその考察 ー郡内小中学生・教職員の意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子

集	年 度 (平成)	内 容
42	13	「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 ー幼児が自ら生活していくための教師の役割ー 白地幼稚園 教諭 木徳 友子 「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 ーへき地の特性を生かした様々な体験活動をとおしてー 東山小学校 教諭 高篠 佳子 生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道 T T授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料 (平成12年度・13年度)から中学校数学におけるT T授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵
43	14	豊かな感性をはぐくむ教育の創造 ー金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美 数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 ー学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワークー 三好郡ネットワークセンター I C T コーディネータ 中川 斉史 生藤 元
44	15	生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 ー身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかわればよいかー 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子 「生きる力」を育む総合的な学習 ーふるさとを愛し、人や自然と積極的にかわろうとする児童の育成をめざしてー 出合小学校 教諭 岡 佳子 「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史 「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について ー人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるためにー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 生きる力をはぐくむ教育の探求 ー「本との出会い」をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美
45	16	ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校 「みる力」を育てる美術教育 ー美術の基礎・基本をみつめてー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元

集	年 度 (平成)	内 容
46	17	幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、 幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元 文字式の指導に関する研究 ー1年文字式における生徒の理解の仕方についてー 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 ー主体的により良く伝え合う力の育成をめざしてー 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 ー共に生きる町づくりについて考えようー 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	19	「健全な心身の成長をめざして」ー高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながらー 第2ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 自らの食生活に関心を持ち、すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 ー学校・家庭・地域の連携した取り組みー 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために ープレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用ー 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」ー何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析をー 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 ー子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えようー 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 ー評価活動におけるマークシートの利用ー 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 榎生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 ー『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心としてー 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 ー構成的グループエンカウンターを考え方を生かしてー 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹

集	年 度 (平成)	内 容
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして 一人やものとかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－ 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－ 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 一人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－ 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－ 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－ 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして－ 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり －小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－ 東祖谷小学校 教諭 森永 直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 －ＥＳＤ（持続発展教育）の視点を取り入れて－ 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 －学級担任アンケート調査と研究授業より－ 昼間小学校 教諭 山口 恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所 研究員 岡本 博一

集	年 度 (平成)	内 容
54	25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ～様々な体験活動を通じて、 地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究～ 昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 地域とともにある学校をめざして ～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～ 三庄小学校 教諭 三好美智代 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 三好中学校 教諭 近藤 剛 複式学級における指導の充実を目指して 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 I C T活用の推進と情報モラル教育 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して 家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践～ 井内小学校 教頭 住田 克弘 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ～学校図書館を中心として～ 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 小中連携教育～東祖谷小中学校の取り組み 三好教育研究所 研究員 岡本 博一